

目 次

巻頭言	情報処理センター長	矢野 喜夫	
大学外部との回線接続変更について	情報処理センター次長・理学科	沖花 彰	1
インターネット利用による授業配信	産業技術科学科	中峯 浩	3
高校教科「情報 B」をスタートさせて	附属高等学校	松森 弘治	6
初めてのグラフィックソフト活用法 - デジタルカメラの画像の印刷・補正・合成 -	美術科	村田 利裕	8

特集 「総合演習」における IT 活用

授業「総合演習」における IT 活用の事例	理学科	沖花 彰	15
総合演習（活動的数学教育）	数学科	丹後 弘司	16
総合演習「子どもとメディア」におけるビデオ編集について	体育学科	杉本 厚夫	19

平成 14 年度情報処理センター利用結果

利用状況	23
利用授業時間割	36
利用授業内容	38
IPC ニュースの発行状況	49
行事日誌	51
ワークステーション利用者一覧	53
関連委員会等歴代委員	54
編集後記	55

巻 頭 言

情報処理センター長 矢野喜夫

この3月に退官された前任者辻先生の残り任期を引き継いで、私が4月から情報処理センター長を勤めることになりました。私はコンピュータや通信についてはまったくの素人で、専門的技術的なことはわからないのですが、辻先生もコンピュータの専門家ではなかったようですから、センター長の役割は専門的なこととは別にあるのだと思って、やらせてもらっています。センター長になってあらためて感じたことは、コンピュータについての専門的なことやセンターの実質的な管理運営面で、センター全体が次長の沖花先生の奉仕的な働きに頼っている部分が、いかに大きいかということです。

私も兼任ですが、次長の沖花先生も兼任で、情報処理センターには専任の常勤職員がいません。専従職員は2人の女性非常勤職員だけで、あとは、月曜日から土曜日まで分担して午後常駐している4人のアルバイト学生指導員で、なんとか運営しているという状態です。大学の情報処理センターとしては比較的小規模とはいえ、コンピュータや施設の管理運営の多大な業務を、専任教職員なしで行っているのは、そもそも無理なような気がします。本来は専任の教官か技官が配置されるべきものだと思います。この点は、今後予想される大学の法人化や改組の機会には、全学的な配慮によってぜひ是正される必要があると思います。

情報処理センターは近年、インターネットや電子メールの利用が学内でも普及するにつれて、従来のコンピュータ関係の授業実施や、教官・学生の研究用のコンピュータ利用に加えて、学内の事務局や図書館、各教官研究室、7附属学校園を結ぶLAN専用回線を利用した通信使用が増え、コンピュータ通信を支える役割の比重が飛躍的に増しました。

今では教務情報のかなりの部分が、インターネットの大学ホームページでも見るようになるようになりました。附属学校園を含めて400人あまりの教職員がE-メールアドレスをもち、1,800人あまりの学生が入学時にメールアドレスをもらって、インターネットやE-メールを利用するようになりました。1日の電子メール送受信数は6,000~8,000件にのぼります。学生はコンピュータ関係の授業だけでなく、インターネットやE-メールを利用するためにも、情報処理センターの端末室をしばしば利用しています。授業期間中には、センターの端末機からのログイン回数で言うと、月に延べ7,000~9,000人がセンターの端末室を利用しています。

コンピュータ通信が普及するにつれて、本学もその例に漏れず、外部からのコンピュータ・ウイルスや不正侵入・改竄問題、内部での不適正使用の問題が起こっていて、そういった外部からの侵入攻撃からいかに身を守り、また内部の利用者モラルを保っていくかが、大きな課題になっています。

今や情報処理センターがオンラインで動いていることは、電気や水道のライフラインが通じているのと同じような、情報のライフラインになりつつあります。それが停まると、大規模停電で都市が機能停止するように、組織の機能が停止しかねないくらいまでに、なりかけています。それにつれて、いわば神経中枢としての情報処理センターの役割の重さは、ますます重くなってきているように思います。

大学外部との回線接続変更について

情報処理センター次長 沖花 彰

平成 15 年 7 月より本学ネットワークから大学外部への接続が変更になりました。これまでは本学から直接、京都大学電話庁舎にある SINET(学術情報ネットワーク)のアクセスポイントへ 10Mbps の専用回線で結んでいましたが、この度京都の地域ネットワークである「大学間情報通信ネットワーク」のアクセスポイント(大学コンソーシアム京都内)まで 100Mbps の光回線(ダークファイバ)で結び、このネットワークを介して SINET へ接続する形態に変わりました。

「大学間情報通信ネットワーク」は(財)京都高度技術研究所等が進める京都の地域ネットワークの一つで京都大学 NCA5(第 5 地区ネットワークコミュニティ)(所在地:京都大学内)、京都高度技術研究所アステム(所在地:丹波口京都リサーチパーク)、大学コンソーシアム京都(所在地:京都駅前)の 3 つのアクセスポイントを 600Mbps~1Gbps の高速光回線で結んでいるものです。このネットワークは京都市が進める「京都 ONE 構想」という大きな地域ネットワークの 1 つを成すもので、京都の多くの国公立私立大学をより太い回線で結び、相互の情報通信、相互交流をより活発にしようというものです。

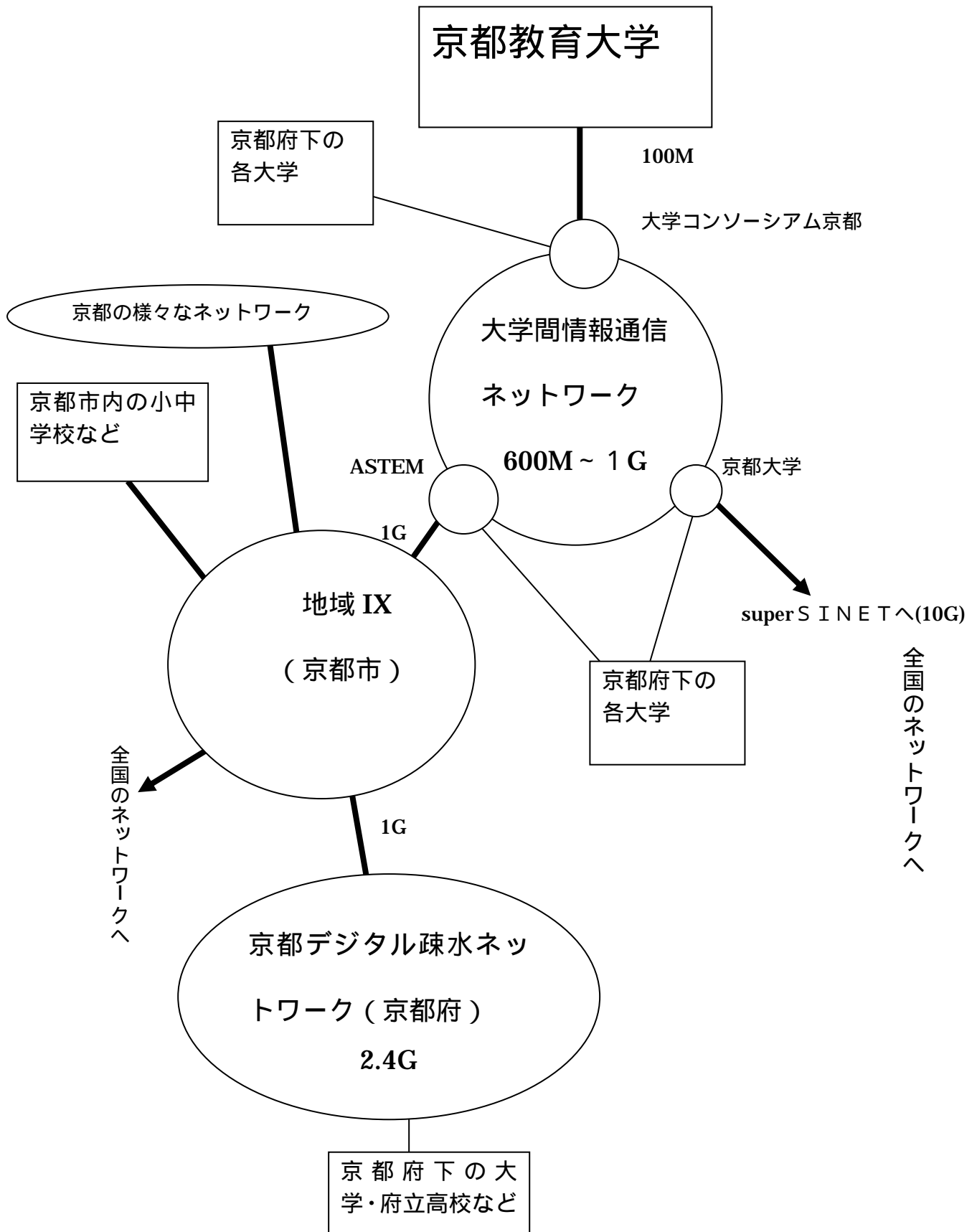
本学は「京都の教育の総合大学」として、すでに大学コンソーシアム京都への様々な授業提供を行っており、また今年度からは京都工芸繊維大学との間にも単位互換協定が結ばれました。今回の情報基盤の整備拡充はこの流れを支援促進するものとして期待されます。

また「京都 ONE 構想」では地域 IX を構築し、京都にある様々なネットワークを接続し、全国のインターネットを経由することなく、京都の中でお互いの高速な通信を可能にすることを目指しています。「大学間情報通信ネットワーク」もこの地域 IX に接続されており、京都市内の小中学校などともより高速に通信できるようになると期待され、教育面での地域への貢献活動がより促進されると思われます。また京都府も京都北部から南部までを 100Mbps の高速回線で結ぶ「デジタル疎水ネットワーク」構想を進めており、このネットワークには京都府下の公立高校が接続されます。この「疎水ネット」も地域 IX と接続されていますので、京都府下の教育支援もより促進されると思われます。

遠隔授業などリアルタイムでの動画配信などは、大量の情報通信を必要としますが、全国のインターネットを経由すると交通渋滞などで現実にはスムーズに配信しにくい現状です。数 100kbps 程度の配信用に圧縮した画像通信が限度です。これが全国のインターネット幹線を経由することなく京都の中だけで特定のネットワーク間で高速に通信できれば、1Mbps 以上の動画などの情報量の大きな通信も可能となり、遠隔授業や E-learning、データベースの提供など様々な教育支援活動が可能になります。本学がこうした情報基盤をより効果的に使い、「京都の教育の総合大学」として地域への教育支援活動をより一層支援することが必要であると考えています。学内のみなさんがこのネットワークの特性を生かした活動を促進されるようお願いするとともに、情報処理センターではそういった活動をより一層支援していきたいと思っています。

次ページにおおまかな京都のネットワーク間の概要と本学の接続を図に示します。

本学と京都の地域ネットワークとの関係の概要図



インターネット利用による授業配信

産業技術科学科 中峯 浩

1. はじめに

ADSL や CATV の普及により、一般家庭でもパソコンからインターネットへの常時接続が日常のことになりつつある。通信回線の高速化により、テキストや静止画像はもちろん、音声や動画などもストレスなく送受信できるようになった。価格破壊とも呼べるような接続料金の低価格化により、長時間のインターネットサーフィンも問題なくできるようになった。無線 LAN などの普及によりコンピュータを操作する場所に対する制約もなくなってきた。このようなインフラの整備は、e-learning の可能性に人々を注目させる引き金となった。

また、生涯学習の普及や不景気に対する不安などの要因も重なって、「いつでも、どこでも、主体的にできる学習」が必要になってきた。よりよい教育を目指すために、本学でも附属との連携や他大学との単位互換などの協調が進められている。このような状況の中で、インターネット利用による授業配信をはじめとした e-learning が重要になる可能性は少なくないと考えられる。

従来¹⁾の大学設置基準では、同時性をもたない授業は大学の単位として認められなかった。しかし、平成 13 年 3 月に大学設置基準が改正され、同時性、双方向性がなくても、面接授業と同等な教育効果が確保されると評価される場合には、その授業を遠隔授業として位置づけ、単位が認められることになった。また、この遠隔授業によって卒業に必要な単位のうちの 60 単位までを取得できるようになった。

このような情勢の中で e-learning を進めていくにあたって、どのような問題点が残されているのかを考えていきたい。

2. e-learning の形態¹⁾

e-learning の形態としては、対面講義のように教官と学生が即時的に意見を交わせるリアルタイム型、いつでもどこでも繰り返し受講が可能なオンデマンド型に大別することができる。

(1)リアルタイム型 e-learning

リアルタイム型 e-learning では、講義室での対面講義とインターネット経由の遠隔講義を同時に実施する。本学でも、教養特別講義などの場においてすでに実施した形態である。まず、講師は教室内において通常の講義を行う。その様子をビデオカメラで撮影し、動画・音声²⁾が遠隔地の受講生に向けてインターネットにより配信される。講義室だけでなく遠隔地にもビデオカメラが設置されていれば、遠隔地にいる受講生もリアルタイムに講師に質問したり、講師の質問に回答することが可能である。

このとき、講師の用意する講義資料がパワーポイントなどで作成された電子資料であれば、当地および遠隔地の双方で同じ資料を正確に共有することが可能である。また、遠隔地の講義室にも来ることのできない受講生でも、メッセージャーなどのようなシステムを用いれば、自宅のパソコンでも受講が可能である。ただし、このリアルタイム型は、講義の行われる時間帯に受講生が講義室あるいはパソコンの前にいる必要がある。したがって、時間の拘束は免れない。また、

ビデオカメラやインターネット配信サーバを操作するスタッフが必要になる。さらに、スタッフの適当なカメラワークや音声切り替えは、学習効果を面接授業と同等にするために重要である。

(2) オンデマンド型 e-learning

次に、オンデマンド型 e-learning では、あらかじめ講義の様子をビデオカメラなどで収録しておく。その画像を電子化して、配信サーバに蓄積しておく。受講生は、ホームページの閲覧をするような容易さで配信サーバにアクセスし、都合のよい時間に好きな場所で受講をすることができる。現職教員や社会人を対象にした講義では、夜間・土日開講での対応がなされているが、オンデマンド型による講義が導入されれば、さらにカリキュラム構成に幅をもてる可能性が大きい。

ただし、オンデマンド型の欠点として、疑問があってもすぐには質問・応答できないなどの即時性の欠如は免れない。したがって、講義を効果的なものにするためには、メールや BBS 等の非同期型のコミュニケーションツールで双方向性を補う必要があると考えられる。面接授業と同等の効果をあげるためには、口頭で済ませれば短時間で終わる質疑応答に対しても、いわゆる添削作業を必ず実施しなければならない。また、サーバに蓄積する講義ビデオを、いわば鑑賞に堪えるコンテンツにするためには、それなりの経験や人的スタッフが必須になる。さらに、サーバの更新やメンテナンスなどの管理をする必要も生じる。

3 . e-learning の心構え

e-learning の両形態からいずれの方法を採用するかは、その講義内容・受講生数・使用する教材の種類などに応じて決定する必要がある。また、半期のうちの何回かだけを e-learning にするという選択肢も現実的であると思われる。しかし、いずれにしても、学内のインフラ整備（システム機器、e-learning 支援スタッフ、マーケットの確保、規定・申し合わせなど）を進めていかなければ、打ち上げ花火のように一過性のもので終わってしまう恐れもある。実際、米国のオンライン大学が最近になって下火になり始めたとの報告もある²⁾。

東北大学で行われている ISTU¹⁾ (Internet School of Tohoku University) では、インターネット経由の受講のみで単位を取れる科目がある。教官と学生が顔をあわせる機会がほとんどなくなるケースも発生するようである。このような状況で学生の理解状況を判断し、成績をつけることの困難さを指摘する声も多い。そのために ISTU のような形態の授業では、成績評価をこれまで以上に厳密なものにしなくてはならない*。このときに必要となるのは、全学的な協力体制であるといわれる。教官や学科による e-learning に対する温度差が顕著になればなるほど、学生からの信頼を得ることはできない。

基本的に e-learning による講義は誰でも受講することが可能である。それがクラッカーによる不正アクセスによる盗聴であるとしてもである。当然、システムとしてのセキュリティ対策は、これまで以上に厳格にしていかなければならない。本学でも情報セキュリティポリシーを徹底し、教官・学生ともに意識向上を図る必要がある。ますます、情報ネットワーク管理委員会・運営委員会などの役割が重要になる。

* e-learning とは関係ないが、たとえば近畿大学農学部水産学科では日本技術者教育認定機構 (JABEE : Japan Accreditation Board for Engineering Education) への対応として、学内定期試験における採点基準、模範解答の公開、試験答案など、教育効果を示す証拠書類の提示が義務付けられている。

また、誰でもが受講できるために、著作権の問題が表面化してくる可能性が高い。すなわち、（故意ではなくても）他人の著作権を侵害する事故、あるいは講師の所有する著作権が侵害される事故が発生するかもしれない。既存の教育現場では、教育目的での利用に限り、著作物の複製を許可されているが、e-learningの現場でこの考え方が適用されるかは定かではないようである。一方、著作権侵害の恐怖感がe-learningの発展を阻害するようなことがあってはならない。そこで、今後は著作権対策委員会のような部署を設置する必要があると出てくるものと考えられる。

4．おわりに

e-learningを本学に定着させるために必要なことは、本学の将来構想におけるe-learningの方針を以下に具体化させるかである。本学が行うe-learningはいったい何を目指しているのかを明確にし、そこに存在する問題点や利用できるノウハウなどを至急にまとめる必要がある。また、e-learningの特徴である他大学や附属校園との連携を考えると、各組織に不足している講義やスタッフをe-learningという方法で互いに補い合うというばかりでなく、e-learningを通じて本学にしかないオリジナルなコンテンツを発信していくという前向きなとらえ方もできる。どちらにしても、本学に携わる教官からのe-learningの将来に対する意見を集約する必要がある。

最後に、インターネットによる授業配信を行うと、教官と学生の関係が希薄になるという危惧がある。しかし、以下の2つの初期値でシミュレーションを行うと、意外な結果になる！？

初期値1（教官と学生の関係がすでにできている場合）:

通常のコミュニケーションだけではわからなかった部分が発見できるかもしれない。

初期値2（教官と学生の関係ができていない場合）:

電子的コミュニケーションが関係発生や改善のきっかけになるかもしれない。

今後の課題は、このシミュレーションの妥当性を実地に検証していくことであると考えている。

参考文献

- 1) 渡部信一、熊井正之、三石大：東北大学インターネットスクール立ち上げの試み、教育システム情報学会誌、Vol.20, No.2, pp.214 - 218 (2003)
- 2) 坂本昂：e - ラーニングの国際動向、IDE 現代の高等教育、No.440, pp.11 - 17 (2002)

高校教科「情報B」をスタートさせて

附属高等学校 松森 弘治

1. はじめに

本校では、平成15年度より実施の教育課程において1, 3年生に「情報B」(1単位)が必修としておかれ、普通教科「情報科」の授業がまず1年生5クラス約200名の生徒を対象に開始された。以下では本校の情報科授業の概要を紹介したい。

本校では、コンピュータ教室のみならず、すべてのHR教室にインターネットに接続可能なパソコンの端末が設置されており、また、すべての教室に情報コンセント(インターネットに接続可能)が設備されている。

また、Sドライブと呼ぶ、生徒が自由に読み書き出来る領域が校内LANのサーバーに設けてある。これらの領域に生徒は教材を置いたり、課題を提出したり様々な形で利用出来る。

2. 授業内容の紹介

授業時間数の約3分の1をコンピュータによる実習にあてている。そのため、TAとして京都教育大学の社会人入学の学生の方に来ていただいて教官とふたりでチームを組んで指導に当たっている。コンピュータ教室はもちろん、HR教室での授業においても1クラス約40名なので、実習時には2人でも机間巡視をしているとてんでこ舞いである。本年度当初に生徒に情報機器に関するアンケートを実施したが、習熟の度合いは個人差が大きく、個人のwebページを所有し、FLASHによるコンテンツを作成している生徒もいれば、キーボードからの文字入力に対して不安を感じている生徒もいるようなので、課題をこなすのに時間差が出来てしまう。

図1 HR教室での授業「情報量の単位」

図2 コンピュータ教室での授業「グラフ作成」



1学期に実施した内容の主な項目は次のようである。

- ・問題解決の流れと手段
- ・手作業による問題解決
- ・コンピュータのしくみとはたらき

3. 本校の情報科授業の特色

情報の科学的な理解を深めるとともに以下のような特色を持った授業を行っている。

- ・ ML等の利用による情報社会への参画する態度の育成

単に情報技術に関する知識を理解するだけでなく、みずから情報を発信し、情報社会の一員として自覚を持って授業に臨むとともに、実用的なねらいももって年度当初よりML（メーリングリスト）を構築した。次に概要を述べる。本校では生徒個人個人にメールアドレスを割り当てていない。そこで、生徒が経済的な負担なく利用できること等を勘案してFreeML（<http://www.freeml.com/>）という出来合いのMLシステムを利用した。これは最後の数行に広告が入るが、microsoft社のhotmail（<http://www.msn.co.jp/home.armx>）というこれも無料のメールアドレスを使用すれば生徒各自がwebメールを利用することが可能となる。なお、諸般の事情により、携帯電話のメールについてはこれへの転送や利用は現時点では実施していない。FreeMLのMLを各クラスごとに構築し生徒のhotmailアドレスを指導者側で登録した。これを利用して、授業に関するデータや素材を添付ファイルの形で提供したり、生徒の作品の一時的な提出先等の利用にも使える。

また、このMLは授業以外にもクラス内の連絡や交流にも使える。先日はある女子生徒が花火大会の様様をカメラ付携帯電話で撮影し、その画像を添付して残暑見舞いとしてクラスに配信した。（撮影者の承諾を得て）ご参考までに紹介する。



図3 花火

- ・ 大学との連携

特別講義等の実施

インターネットの歴史的生き立ちから最新の情報通信技術についてまで幅広く、「情報倫理」と題して、京都教育大学理学科の沖花先生に特別講義をある講座に対して実施した。また、別の講座に対してはプレゼンテーションソフトのマイクロソフトパワーポイントを使用したプレゼンテーションのモデルの演習をやはり沖花先生にしてもらった。



図4. プレゼンのモデルの演習

4. おわりに

1学期は時間の関係でとれなかったが、2学期以降にはコンピュータのハードウェア的な原理を理解する工作やwebページの製作等も予定している。

プレゼンの技能やwebページの製作は他教科の学習とも連携しているし期待もあろうかと思われる。生徒の情報活用能力がますます向上するように各方面からのご意見アドバイスをいただければ幸いである。

謝辞 授業協力をいただいた京都教育大学 沖花 彰先生、小竹芳雄先生に感謝申し上げます。

特集 「総合演習」における IT 活用

平成 12 年度の大学改組の一環として教員を目指す学生のために「総合演習」という必修の授業科目が設置された。3 回生時の履修となるため実際の開講は今年で 2 年目である。20 名以下のクラスを 20 程度設け、受講生はその中のいくつかを順位をつけて希望し、「総合演習」運営会議及び担当者会議で調整している。授業形態や授業内容は、各担当教官に任せられている。その中で情報処理センターを利用するものもいくつか設置されているので、本年報の特集の一つとして、情報処理センターを使った総合演習の事例について担当教官からご寄稿いただいたのでここに紹介する。ご寄稿いただいた諸先生にお礼申し上げます。

授業「総合演習」における IT 活用の事例

理学科 沖花 彰

小生が担当するこの授業は本年度後期の開講で、実はまだ実施されていない。そのためここでは本授業の概要とねらいを紹介する。

情報化社会の急速な流れの中で、今やインターネット利用者は日本全国民の半数を越えるまでにいたった。(H14 年末で 54% 総務省調べ)。全国の公立学校のインターネット接続率は平成 14 年度末でほぼ 100%で、そのうち 1.5Mbps 程度以上の高速回線での接続は半数を越えている。こういった情報基盤の整備と共に教員の情報能力の一層の向上が求められている。平成 14 年度でコンピュータを操作できる教員の割合は 9 割弱あるが、コンピュータを使って授業指導ができる教員の割合は小学校で約 2/3、中・高等学校では半数以下である。学校教育において情報技術を生かした授業は今後必須のものになると思われ、本学の教員養成プログラムにおいても情報活用能力の養成は不可欠であると思われる。

こういった情勢を背景に、この授業では動画・アニメーション作成編集、HP、プレゼンテーション作成などの基礎技術を習得し、それらを活用して授業教材を作成する IT 活用能力の育成を目的とする。受講生が 3 回生で後期なので教育実習を経験しているものが大半である。そこで実際に各自が学校現場での授業を想定し、その中で如何に IT を活用するかを模擬実践させたいと思っている。動画キャプチャ及び編集入門、アニメーション作成入門、HP 作成入門などを行った上で各自テーマを考え教材作成を行う。最終日に発表会を行う。

以下のような流れで行う予定である。

(1) マルチメディアの基礎知識 (1 時間)(授業形態：講義)

ここでは扱うマルチメディアファイルの種類、情報量、ファイル圧縮、周辺機器などの基礎知識を学習する。

(2) 静止画、音声などの入出力練習 (1 時間)(授業形態：実習)

(3) 動画キャプチャ及び編集練習 (ソフト：DVRaptor 2 時間)(授業形態：実習)

(4) アニメーション作成練習 (ソフト：LiveMotion 2 時間)(授業形態：実習)

(5) ホームページ作成練習 (ソフト：Ms-Frontpage2002 2 時間)(授業形態：実習)

(6) プレゼンテーション作成練習 (ソフト：Ms-Powerpoint2002 1 時間)(授業形態：実習)

(7) 教材作成 (4 時間)(授業形態：各自の実習と個別指導)

(8) 発表会 (2 時間)(授業形態：各自の発表と相互評価)

総合演習(活動的数学教育)

数学科 丹後弘司

1. はじめに

最近のコンピュータはハード面にもソフト面にも長足の進歩をとげ、それ故に利用の仕方によっては、数学分野にも大いに役立つことと思われる。もちろん、利用の仕方、入力と出力のみがわかり、内部でなにが行われているかを理解しない使い方ではその有効性も限定されたものになる。ここでは、主としてノート、コンパス及び定規の役割をコンピュータが果たすという、コンピュータの利用のしかたを行った。

2. 授業の目的、使ったソフトの説明及び授業の概要

授業の目的は一言でいえば「数学的思考方、数学の楽しみ方を、コンピュータを利用して体験的に身に着ける。」である。その目的に沿うよう次の性質をもつソフト GDView0.class を作った。

- 1 コンピュータのハードの制約をできるだけ少なくし広く公開可能にする。
- 2 正確な平面図形が描ける。
- 3 図形を描くにあたっては図形の知識を使う。

1の性質をみたくためソフトは Java で作りその class を APPLET として HTML ファイルの中に読み込んで、HTML ファイルの中で各自自由に作品がつかれるようにした。従って、作った作品はホームページで公開可能になる。

2の性質を満たすため、実際ディスプレイ上で図を描くときは近似的に描かざるを得ないが、描くためのデータはできるだけ正確なままに保つ。また拡大縮小や平行移動は自由に行えるようにしておく(この部分はブラックボックス的に利用者はその機能を使うだけ)。この正確さにより、平面図形問題を解くにあたり的確な判断が下せるのみならず、新しい事実の発見にも役立てることが可能になる。

3については、単に完成された図がきれい(これも大事だが)というだけではなく、作品をつくること自体が今までの既習の図形の知識を利用する数学的活動になるように工夫した。この部分は例でもう少し詳しく触れることにする。

授業は

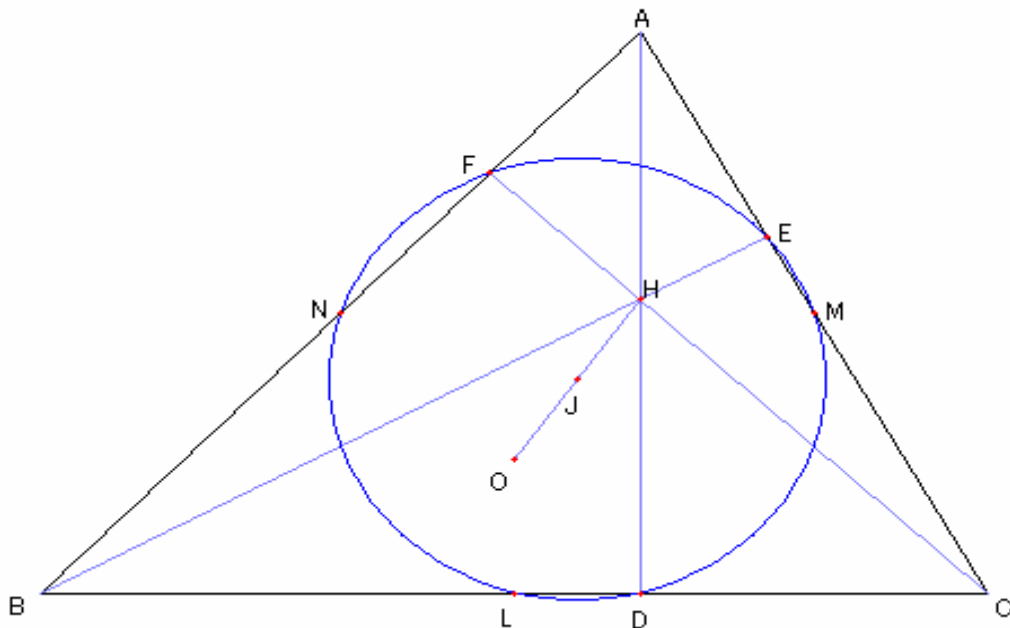
1. オリエンテーション(1週)
2. コンピュータを使った基本的練習(8週)
基本作図、イラスト描画、円周率の実感等
3. 作品作り(3週)
4. 作品発表(インターネットで公開)

のスケジュールで行われた。この授業の大部分は基本練習に費やされたが、これは情報処理センターを活用することにより有効に機能したように思われる。

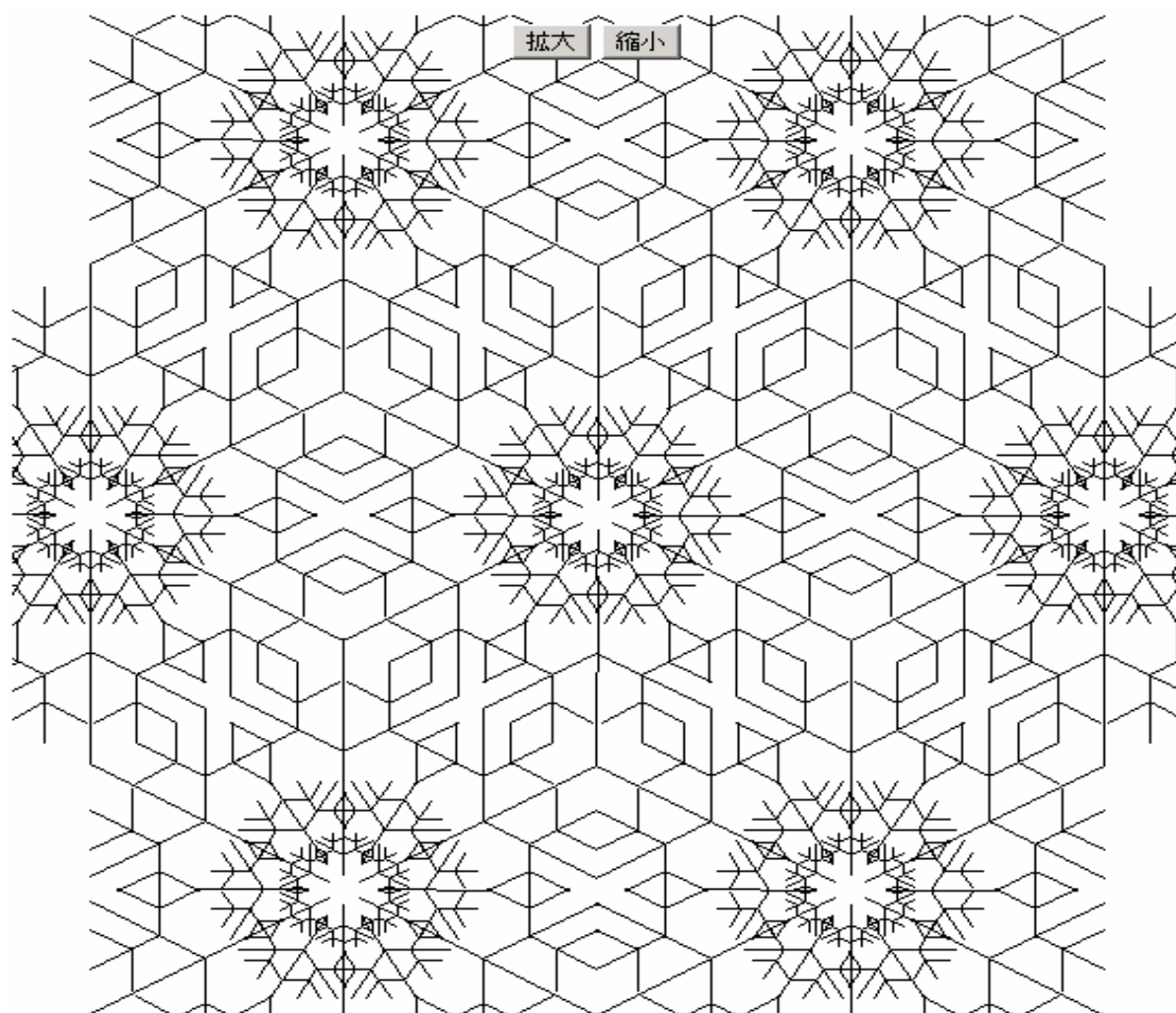
3 基本練習の例と作品例

```
<HTML>
<HEAD><TITLE>練習</TITLE></HEAD>
<BODY>
  <APPLET CODE="GDView0.class" WIDTH=600 HEIGHT=560>
<param name=command0 value="read hajime">
<param name=hajime value="
  set 0 0 0; color 255 255 255; fcircle 0 20;
  set A 0.8 2;          set B -3 -2;          set C 3 -2;
  set D suisen ABC;    set E suisen BCA;    set F suisen CAB;
  set L naibun BC 1 1; set M naibun CA 1 1; set N naibun AB 1 1;
  set H suisin ABC;    set O gaisin ABC;    set J naibun HO 1 1;
  color 0 0 0;line ABCA; color 128 128 255;line AD BE CF OH;
  color 0 0 255;circle JD; color 255 0 0; point DEFLMNHOJ;
  skigou ABC ABC;      kigou AD D BE E CF F HO O OH H AJ J;
  kigou AL L BM M CN N;">
</APPLET>
</BODY>
</HTML>
```

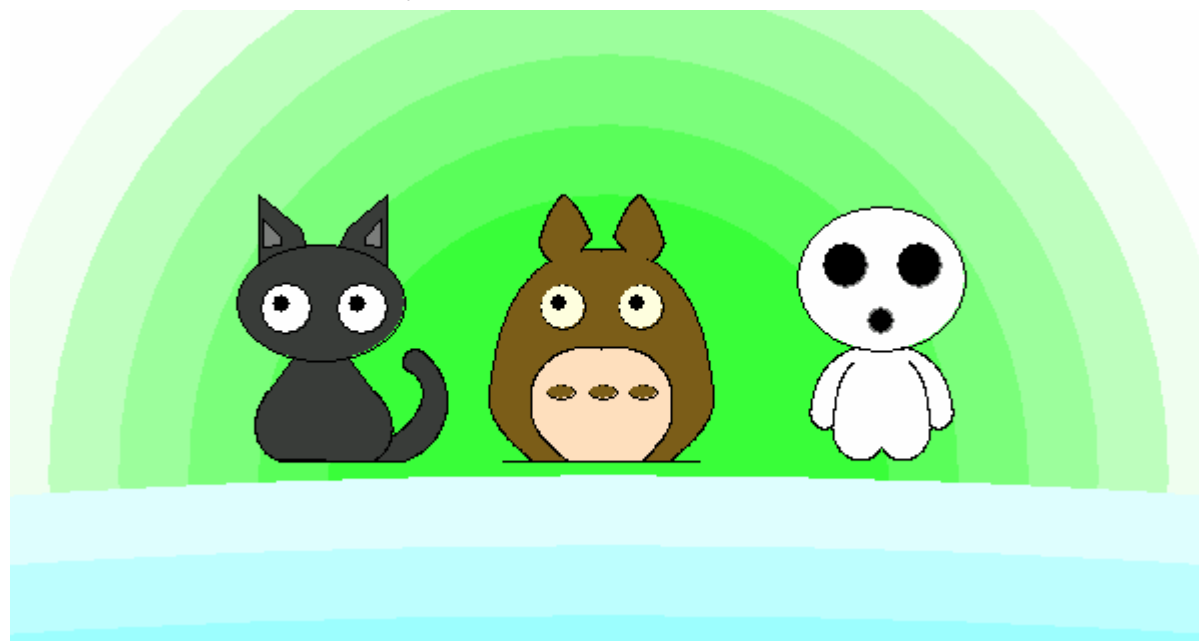
これは始めのころに与えた基本練習の例である。上の HTML ファイルを読み込んで実行したのが、下の図である。set A 0.8 2; で点 A の座標を指定し、set D suisen ABC; で A から BC に下ろした垂線の足を点 D としている。set L naibun BC 1 1; で線分 BC の中点を L としている。この例は9点円の定理の図を描く例である。



次は終わりの方に与えた基本練習の例の実行結果である。



次は受講生の作品の例である。



総合演習「子どもとメディア」におけるビデオ編集について

体育学科 杉本厚夫

授業のねらい

現代、子どもたちはテレビを初めとした多くのメディアに取り囲まれています。そして、これらのメディアが子どもの遊びに及ぼす影響、あるいは身体に及ぼす影響が社会的に問題になっています。諸外国では、すでにこの問題解決のため、学校のカリキュラムの中にメディア・リテラシーの時間を設け、メディアと上手に付き合う方法について、子どもたちが学習できるようにしています。そのメディア・リテラシーの授業では、実際に自分たちでメディアを使って作品を作り、そのことを通してメディアのメカニズムを学習し、どのようにわれわれに情報が伝達されるのかを体験するという方法がとられています。

そこで、この授業は現代社会のメディアに関して、自分たちで資料を収集し、それをもとにディスカッションし、実際にメディアの作品を作成することを目標としています。そして、その作品が出来上がるまでをレポートし、PowerPointで発表します。このような活動を通して、「総合的学習の時間」の授業を子どもたちと一緒に創るための体験をします。

この授業では、メディアは文字文化に依拠した新聞や雑誌、音文化が中心のラジオ、映像文化を中心としたテレビ、映画などに分けられます。この中から自分たちが関心興味を持ったカテゴリーを選び、調査し、作品を作ります。今回は、映像文化を選んだ人が多く、映像によるCMに取り組む班、テレビドラマの予告編に取り組む班、映画を作る班の3つのグループに分かれて学習しました。

ビデオ編集

ビデオ編集についても、総合的な学習となります。つまり、自己学習が中心なのです。まず、使い方を知っている人を探します。そして、その人に使い方を教えてもらいます。ここが総合学習で大切なことで、自分ができないことを如何に人に頼むか、この交渉能力が問われるのです。私が教えてしまえば、簡単なことなのですが、それでは総合的な学習になりません。

また、ここでは編集の得意な子、音を入れるのが得意な子、機械を操作することが得意な子、あるいは発表のPowerPointを作成するのが上手な子などなど、それぞれの持ち味を活かして、一つの作品に仕上げていきます。このような中で、それぞれの専門性が磨かれると同時にそれらを活かし合う集団が出来上がってきます。それは、まさしくNHKのプロジェクトXの学生版といってもいいでしょう。

とにかく、そこには教える人は誰一人としていないのです。自らが、問題を設定し、その問題を解決するためにどのようにすればよいかを議論し、そして実行に移し、そのことがねらいと合っているかを評価し、修正し、また実行するということを繰り返していきます。つまり、Plan Do Seeの連続の中で、作品は出来上がっていくのです。

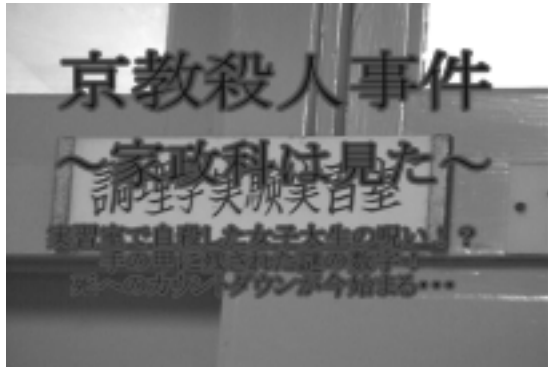
このような総合演習の中で、学生たちは何を学んだのか、彼らの感想から見てみましょう。ドラマ班、映画班、CM班のそれぞれの代表的な感想文を見てください。

学生の感想

<ドラマ班>

私は、1回生の時に集中講義で杉本先生の「子ども臨床社会学」を受講して先生の話や人柄にとても惹かれた。毎回とても楽しく、そして説得力のある話ばかりで、大学に入ってはじめておもしろいと思える授業だった。その授業以来、先生の話聞く機会が無く、残念に思っていたころに総合演習の話が出てきた。私は杉本先生の名前を見つけたときから、この授業しかないと確信していた。

受講できることになり、授業が始まると、自分たちで好きなようにすればいいということでも



でも意欲がわいた。私たちは興味だけで「ドラマの予告づくり」をすることにした。日頃の授業とは違い、自分たちで進めていく分、楽しい反面大変なこともたくさんあった。やはり、遊びではないものをつくりたいという思いから、絵コンテや撮影、編集作業まで見様見真似でがんばった。私はキャスト役と編集作業の担当に当たっていたのだが、作業を通して、編集装置の使い方などの知識面だけでなく、そのほかいろんなことを学んだ。

まずはコンピュータという機械のすごさとそれを操る難しさである。今回一緒にの班にコンピュータに詳しい友達だったので作業を比較的スムーズに進めることができたのだが、技術を駆使することによって、いろんな表現をすることができることに気づいた。今回はパワーポイントやビデオカメラ、デジタルビデオカメラなどを使い、自分たちの機械に対する技術をすべて使い果たした気がする。

もうひとつ学んだことは、協力して何かを作り上げるといふことの大切さである。私たちは作業中に何度も先生に助けを求めたが先生は決して答えを教えてくれなかった。冷たいなと思っていたが、実は先生の教育方法だと聞き、今ではありがたく思う。自分たちで思考錯誤して見つけた答えは忘れないし、自分たちだけで作りあげたものが完成したときの喜びは何ものにも変えがたい。そして、一緒につくりあげたメンバーとの距離がぐっと縮まる。

総合演習を受講して、つくりあげる喜びをみんな感じたのではないかと思う。少なくとも私は大いに感じた。先生が最後におっしゃっていたように、最近の子どもは一人でやろうとする傾向がある。だから子どもたちにみんなで何かをつくる喜びを伝えてあげていかななくてはいけないという話にはとても納得できた。将来、教師になったときには、私は子どもにぜひ教えてあげたいと思っている。

半期間、御世話になりました。自分たちでつくった作品は一生の宝物にします！

<映画班>

私のグループは映画の予告編を作成した。この取り組みを通して私たちは何を学んだのかを考えてみた。今、学校で取り入れられている総合学習の時間で子供たちがどんなことを学ぶのかを実際に知ることができたのではなかろうか。

私にとって映画の編集はまったく初めての取り組みであった。ましてやパソコンもあまり使い

こなせない状態で、ほとんど無知からの出発であったと思う。しかし、その土台にあったのは、知識などではなく興味、関心、そう、自分がこれをやりたいという意欲なのである。これらが結果的には私を成長させてくれたのではなかろうか。これらは学習するにおいて大事な要素なのである。自ら学ぼうという姿勢が本当の知識につながるのだと私は考える。

編集の過程で苦労したことは多々あった。しかし手探りでなんとかやり方を覚え、どうしようもないときは人に助けってもらった。初めてのことに取り組むのはとても大変なことなのである。しかし一緒にやる仲間がいて協力しあえたからこそできたと思う。編集の最後の段階のあたりで、音を映像に取り入れられたときは感動した。自分たちの作品がますます良いものに仕上がるにつれて、満足感や充実感を感じた。最終的になんとか、CD-ROM にいれることができたが残念なことに映画は入れることができなかった。がんばって作り上げたものをみんなに見せることができないという悔しさを感じた。

発表会も無事に終わった後、クラスみんながIPCにまで私たちの映画を見に来てくれた。これが今までの過程の中で一番の喜びであった。今まであまり話したことのないクラスの人たちとこの映画を通して交流することができたし、クラスの一体感というものを感じた。とても楽しい雰囲気であったと思う。

最後に先生がおっしゃっていたように、人との関わり合いがとても大事であると実感した。人と関わる中で学ぶものは大きいと思う。人間はひとりで生きていくことは不可能である。必ず誰かの世話になっているものだ。だから子供たちにも自ら人と関わり合い、多くのことを学んでほしいと思う。人との関わり合いは心を豊かにしてくれると思う。その豊かさが今子供には必要である。

<CM班>

私はこの授業を受けるまでメディア・リテラシーという言葉すら知りませんでした。しかし、講義を受けたり、実際に映画を作ったりすることで、メディアに対する見方が変わりました。今まで何気なく見ていた番組や広告は制作側の様々な意図によってつくられていることを改めて実感し、受け取る側がしっかりしないと間違った情報に流されてしまうことが分かりました。

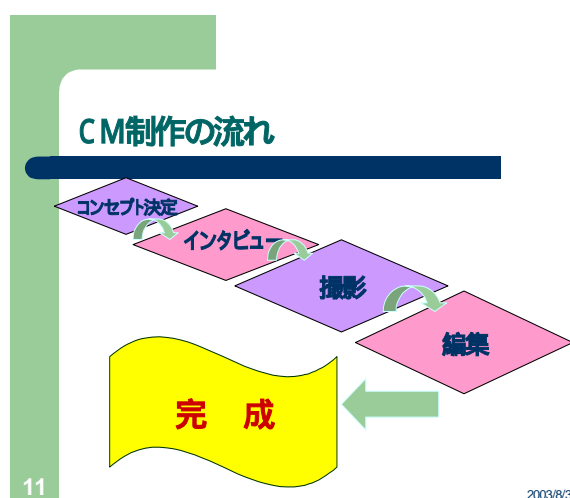
制作においては、何も分からない状態から、自分たちで調べながらつくることが出来る、自信ができました。先生がおっしゃっていたように、みんなで何かをつくるという機会は最近は少なく、コミュニケーション力を高めると共に、お互いに意見を言い合うことで成長することが出来たと思います。

今までもグループ活動をする授業はありましたが、グループ内で役割分担を決めて、他の人の作業にはいっさい関わらず結局個人作業をし

では、世界に先駆けプレミアム先行上映
「BEHIND」

携帯電話をお持ちの方は、電源を切るか他の
お客様の迷惑にならないようにマナーモード
にして下さい。ご協力お願いします。

と思いましたが、CD-Rの容量上、お見せ
できなくなりました。大変残念です。



ていたような気がします。しかし、今回の授業では本当に一つのことをみんなで一緒に考えながらつくっていくことが出来ました。時には1カット撮影するのにみんなで何十分も話し合ったり、取り直したりすることもありました。グループで活動すると、自分の思い通りにいかないことも多いですが、自分では思いつかなかった良いアイデアを他の人から聞くことが出来たりもし、他人の言葉に耳を傾けることの大切さを改めて感じました。

私は去年の先輩方の作品を見せてもらった時に正直、レベルが低いんじゃないかと思いました。もっと簡単にCMなどつくれると考えていたからです。しかし、実際につくってみると、自分たちの伝えたいことを映像にすることは難しく、想像以上に時間がかかってしまいました。

初めに講義でメディアについての知識をいれて、その後実際に制作を体験するという学習方法は力が身に付き、とても良いと感じました。自分が教師になったときもこのような方法で何かを学ばせてみたいと考えます。とても楽しく勉強出来ました。

このように、単にメディア・リテラシーとして、ビデオを編集するだけではなく、その過程で、総合的な学習のねらいである問題解決をグループで取り組んだところに、この授業の特徴があったといえるでしょう。学生の学習能力は非常に高いものであり、それを引き出す授業を展開、すなわち、はっきりとした目標の提示と自主的な取組みの担保が有効であったと考えます。そして、何よりもこれら一連の授業の展開を「グループ学習」で行ったところに意義があるのではないかと思います。

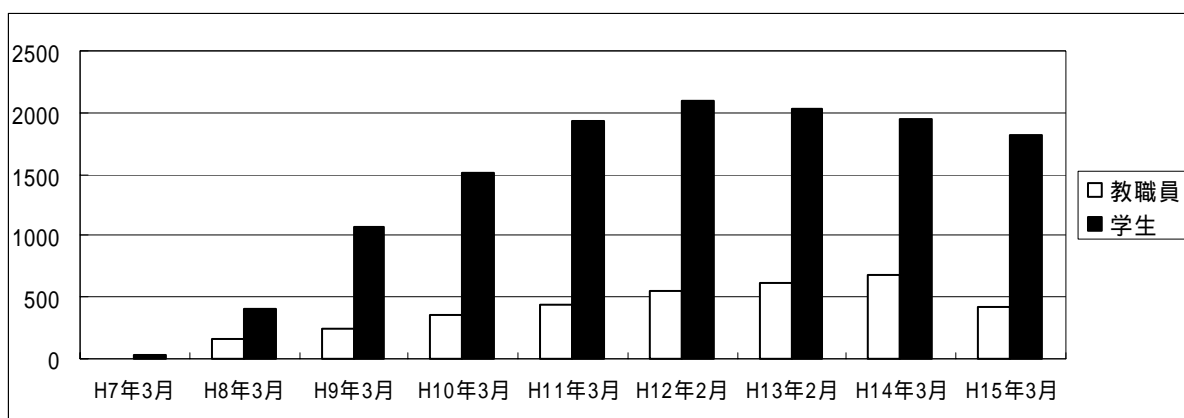
平成14年度
情報処理センター
利用結果

平成14年度利用状況

§1. 電子メール

(1) 電子メール登録者数 (H15.3.11 現在)

大学教員	144人	附属教員	151人	事務職員	124人		
学部学生	1613人	研究生	62人	院生	138人	合計	2232人

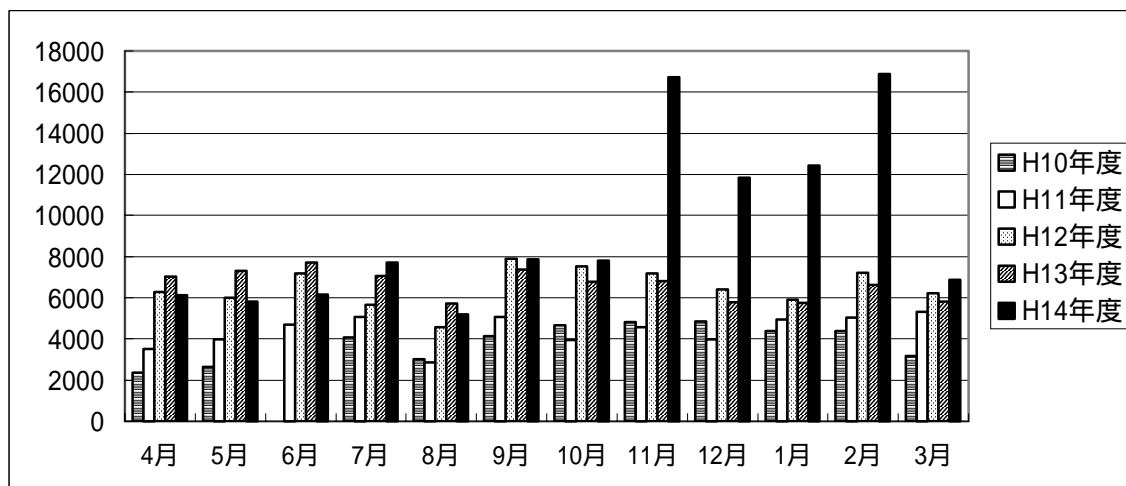


過去9年間電子メール登録者数推移

平成12年度より学生定員が1学年420人から300人に減少したことにより年次進行で学生登録者数が減少している。教職員数が今期大きく減少したのはメールアカウントを1人1つに制限したためである。1-4回生は入学時自動登録され、全学生が登録している。教職員は大学教員、附属教員、職員の他名誉教授も含まれる。在籍する教職員・学生はほぼ全員登録している。

(2) 電子メール送受信数 (H14年4月~H15年3月)

4月	6111件/日	5月	5800件/日	6月	6146件/日	7月	7720件/日
8月	5207件/日	9月	7878件/日	10月	7815件/日	11月	16710件/日
12月	11840件/日	1月	12449件/日	2月	16870件/日	3月	6877件/日

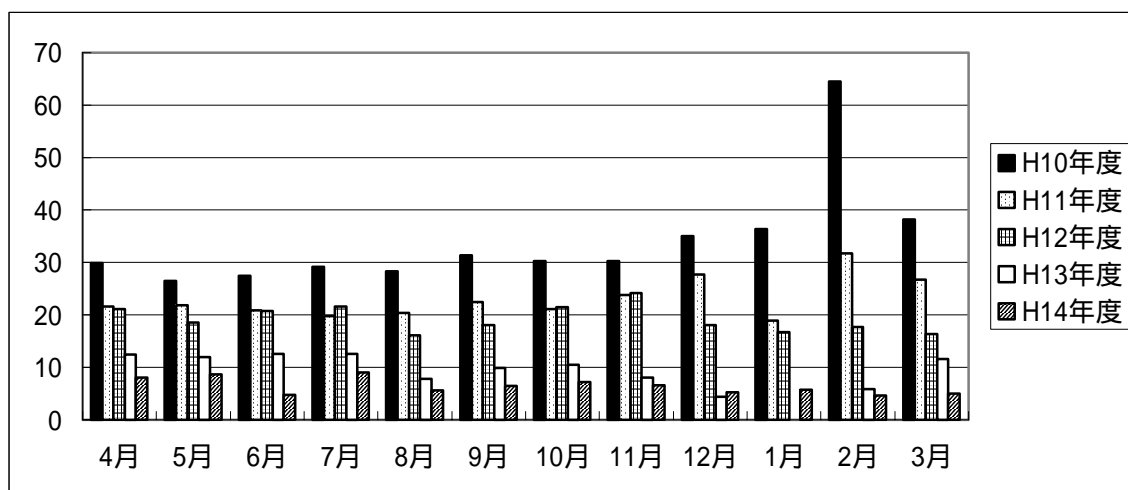


1日あたり電子メールアクセス数推移

1日あたりのメール送受信数を示す。11月から2月にかけて大幅に増えているのは学内でのウイルスによると思われる不明メールの発信があったためである。これについてはメールサーバで不明メールを処理しないようシステムの再構築を行い、3月は正常に戻っている。

(3) ダイヤルアップ (PPP) 接続時間数 (H14年4月～H15年3月)

4月	8時間/日	5月	8.7時間/日	6月	4.7時間/日	7月	9時間/日
8月	5.6時間/日	9月	6.5時間/日	10月	7.7時間/日	11月	6.6時間/日
12月	5.3時間/日	1月	5.7時間/日	2月	4.6時間/日	3月	5時間/日



1日当たりのPPP接続時間数 (時間)

ダイヤルアップ回線は7回線自由に利用できるようになっている。年々減少傾向にあるが昨年は一層この傾向が顕著であった。これは携帯電話の普及、商用プロバイダの契約が安価で、大学のプロバイダサービスよりもそちらを利用する傾向にあると思われる。

(4) メールサーバ利用者用ディスク使用量(H15.3現在)

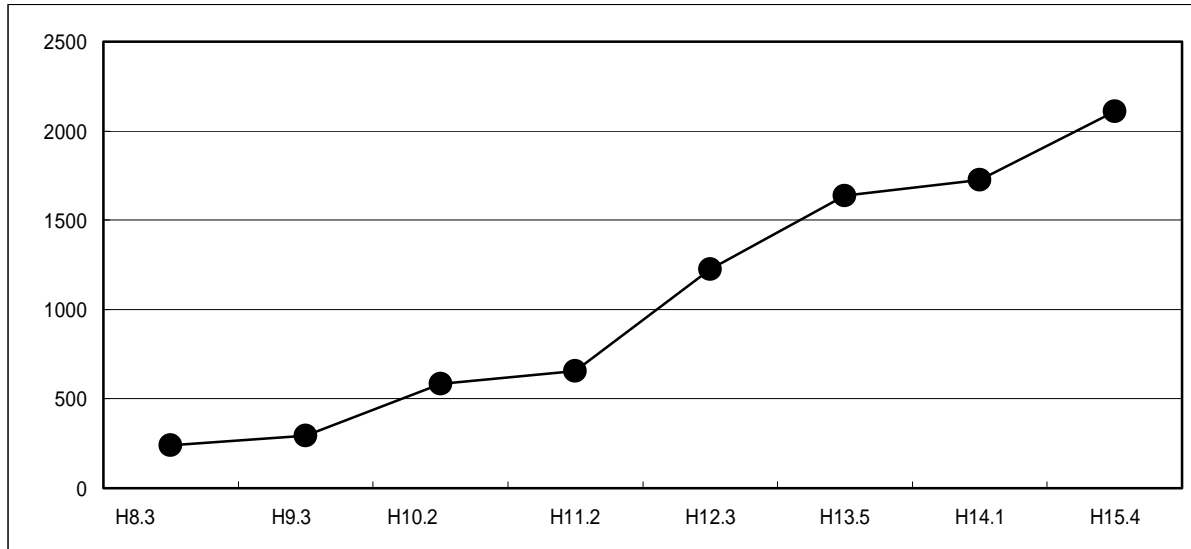
利用者領域 (/home) 総容量 108.4GB 使用率 17%

§ 2 . ネットワーク

(1) 学内ネットワーク接続クライアント数 (H15年4月末)

情報処理センター	273	A、C、理科教育棟	183	F棟	24
B棟、実践総合センター	280	G棟	120	D、特美、トレセン棟	56
本部庁舎	150	大学会館等	38	図書館	63
国際交流会館	83	環境センター	14	高校	158
養護学校	55	桃山中学校	157	幼稚園	15
桃山小学校	126	京都中学校	188	京都小学校	127
				合計	2110台

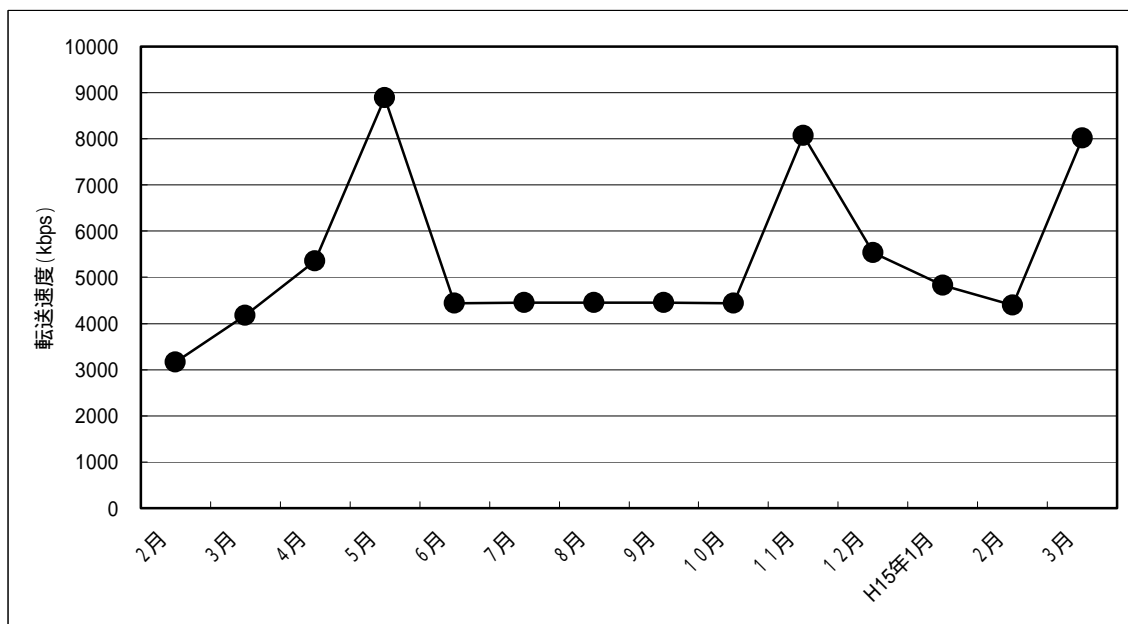
平成11年ATM導入以降急速に増大している。学内すべての研究室・講義室・演習室・事務室に100Mbpsの情報コンセントが敷設されている。学生の集まる場所にはH14年度から無線LANのアクセスポイントを17カ所設置している。



学内ネットワーク接続端末数推移

(2) トラフィック状況

a) 学外 (SINET) との通信量 (H14.2~H15.3)

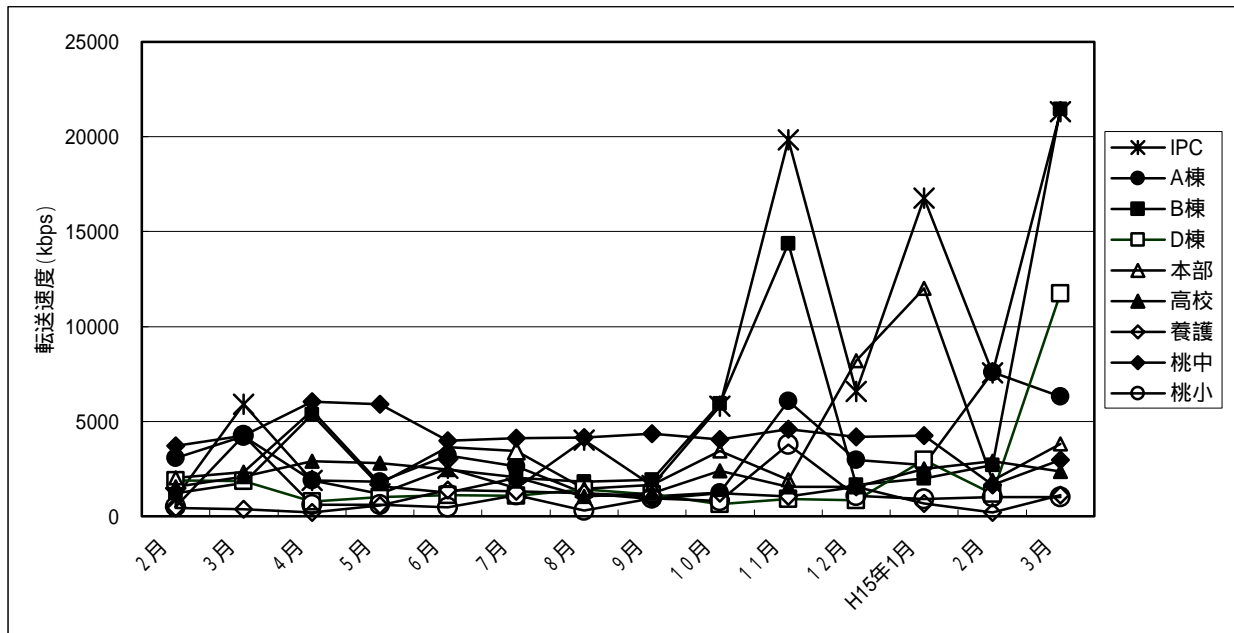


月ごとの最大通信量

平成 14 年 3 月まで 5Mbps で 4 月から 10Mbps に回線契約をアップした。通常期使用率はほぼ 5 割で動画配信を行った時期は 8 割に達している。

b) 学内の通信量 (H14.2~H15.3)

ATM 交換機と各建物の ATM スイッチとの間の通信量である。



各建物内のLANはH14年3月まで10Mbps、4月より100MbpsのイーサネットLANである。10Mbpsを越える利用がまだ一部ではあるが増えている。附属学校は10Mbpsを越える利用までには至っていない。

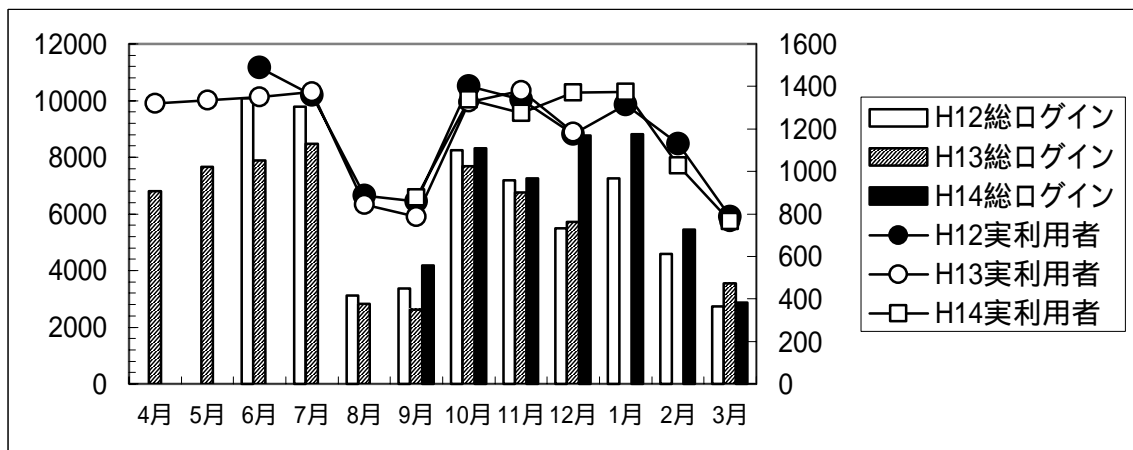
§ 3 . 端末室利用

(1) 端末室パソコン利用者数 総ログイン数 (実利用者数) (H14.4 ~ H15.3)

9月 4170(876) 10月 8326(1338) 11月 7248(1275) 12月 8766(1370)
 H15年1月 8822 (1374) 2月 5438 (1026) 3月 2874 (764)

注：4月から8月までは集計プログラム更新のためデータはない。

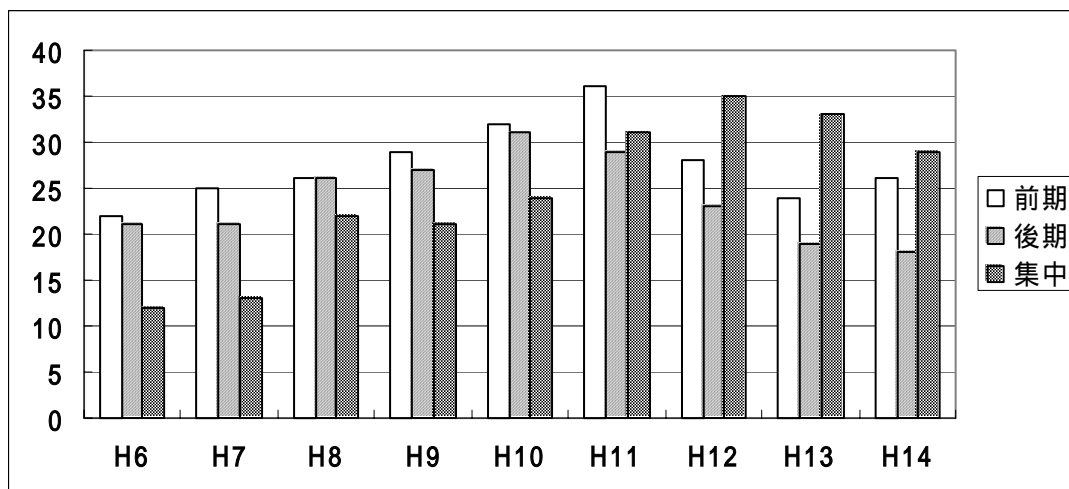
総ログイン数は毎月の利用延べ人数を指し、実利用者数が重複のない利用人数を表す。授業休止期間を除いて、毎月1300～1400人を越える利用者(ほとんど学生)が情報処理センターの端末を利用している。学生数が減少しているのに利用者数が減っていないことから利用率が増加していることがわかる。(学生の9割近くが毎月1回は利用している。)



月ごと端末ログイン回数、実利用者数

(2) 端末室授業利用コマ数 (H14 年度)

前期 26コマ 後期 18コマ 集中授業 29コマ



年間端末利用コマ数推移

平成12年度より大幅なカリキュラム変更があり、全授業数が減少した。そのため授業利用数もやや減っている。一方同じ時間帯に集中したり、1科目の受講生が集中するなどの傾向がある。時間割は 頁参照。

§4. ワークステーション利用

1. 研究用ワークステーション (H15.3.11 現在)

(1) 登録者数

教職員 35人

学生 15人 合計 50人

(2) 利用者用ディスク使用量

利用者領域 (/home) 総容量 17.4GB 使用率 58%

2. 教育用ワークステーション (H15.3.11 現在)

(1) 登録者数

教職員 9人

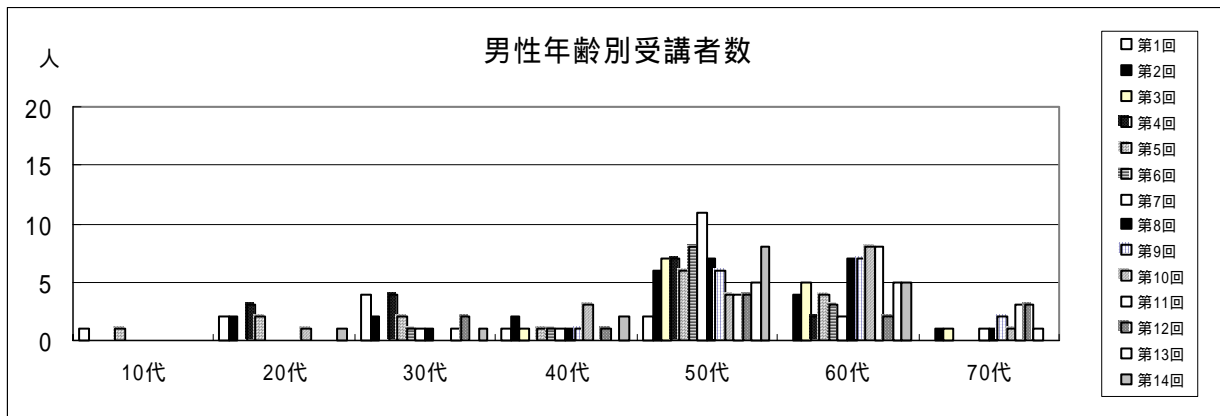
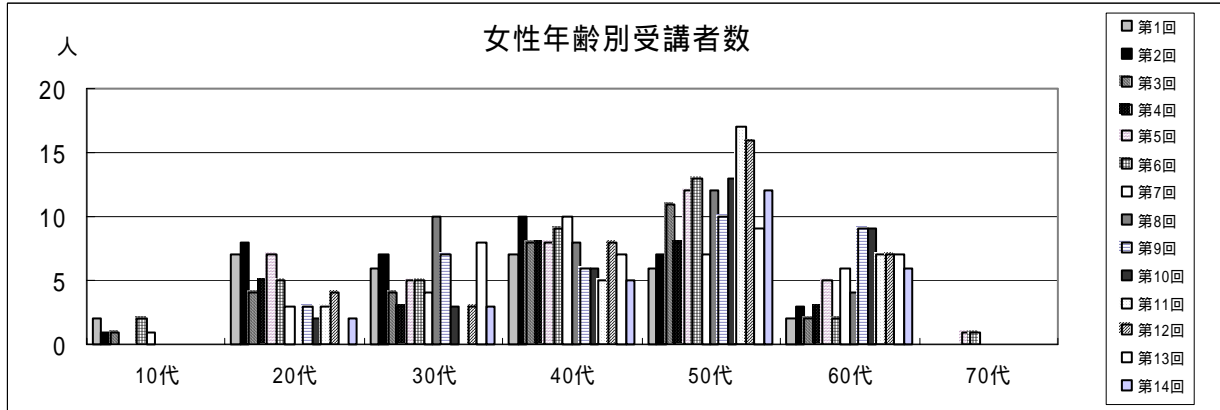
学生 163人 合計 172人

(2) 利用者用ディスク使用量

利用者領域 (/home) 総容量 10.1GB 使用率 18%

§5. 貸出機器利用数

端末室以外での授業利用として、A4 ノート 20 台、B5 ノート 3 台、液晶プロジェクタ 1 台、デジタルビデオカメラ 1 台、デジタルカメラ 1 台を貸し出している。授業期間中は A4 を講義室で利用することが多い。B5 は教官の出張時の利用で 9,10 月に利用が多い。



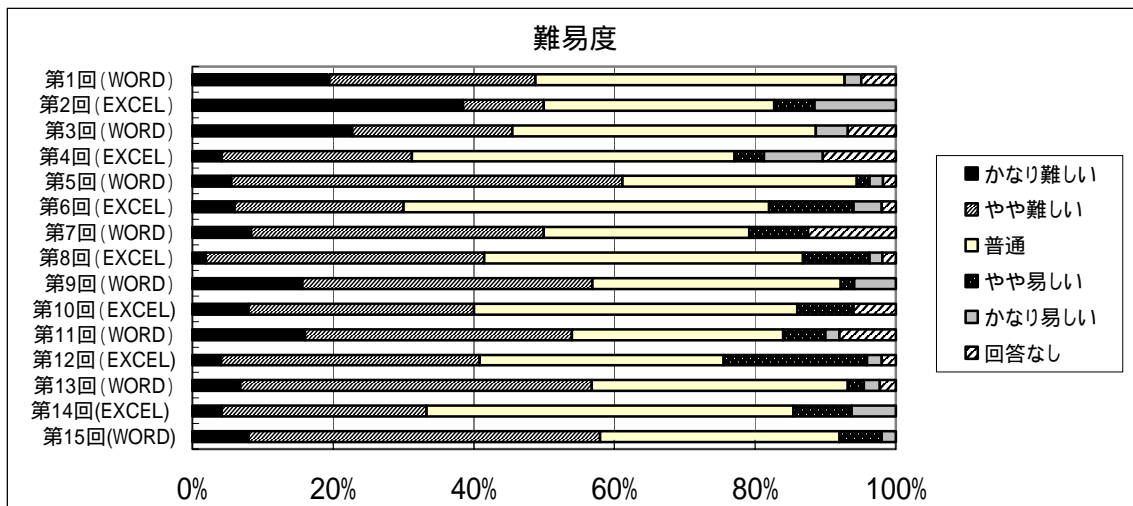
受講者のアンケート調査結果

1. 難易度

(単位:人)

	かなり難しい	やや難しい	普通	やや易しい	かなり易しい	回答なし	集計人数
第15回(WORD)	4	25	17	3	1	0	50
第14回(EXCEL)	2	14	25	4	3	0	48
第13回(WORD)	3	22	16	1	1	1	44
第12回(EXCEL)	2	18	17	10	1	1	49
第11回(WORD)	8	19	15	3	1	4	50
第10回(EXCEL)	4	16	23	4	0	3	50
第9回(WORD)	8	21	18	1	3	0	51
第8回(EXCEL)	1	21	24	5	1	1	53
第7回(WORD)	4	20	14	4	0	6	48
第6回(EXCEL)	3	12	26	6	2	1	50
第5回(WORD)	3	30	18	1	1	1	54
第4回(EXCEL)	2	13	22	2	4	5	48
第3回(WORD)	10	10	19	0	2	3	44
第2回(EXCEL)	20	6	17	3	6	0	52
第1回(WORD)	8	12	18	0	1	2	41

かなり難しいという声は少ないがやや難しいがWORDの講習に多い。内容を少し再検討する必要があると思われる。

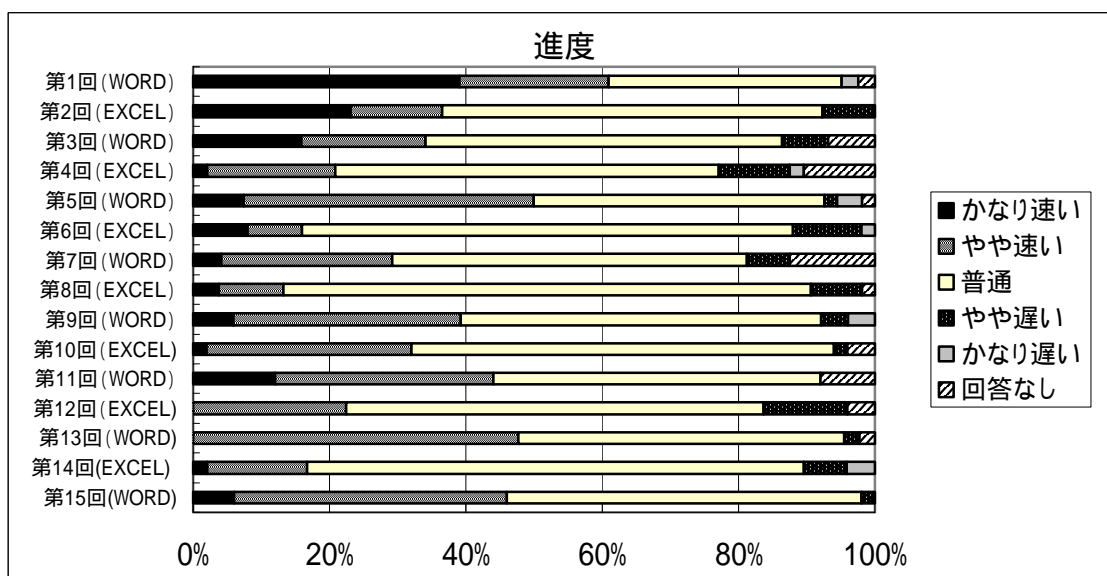


2. 進度

(単位:人)

	かなり速い	やや速い	普通	やや遅い	かなり遅い	回答なし	集計人数
第15回(WORD)	3	20	26	1	0	0	50
第14回(EXCEL)	1	7	35	3	2	0	48
第13回(WORD)	0	21	21	1	0	1	44
第12回(EXCEL)	0	11	30	6	0	2	49
第11回(WORD)	6	16	24	0	0	4	50
第10回(EXCEL)	1	15	31	1	0	2	50
第9回(WORD)	3	17	27	2	2	0	51
第8回(EXCEL)	2	5	41	4	0	1	53
第7回(WORD)	2	12	25	3	0	6	48
第6回(EXCEL)	4	4	36	5	1	0	50
第5回(WORD)	4	23	23	1	2	1	54
第4回(EXCEL)	1	9	27	5	1	5	48
第3回(WORD)	7	8	23	3	0	3	44
第2回(EXCEL)	12	7	29	4	0	0	52
第1回(WORD)	16	9	14	0	1	1	41

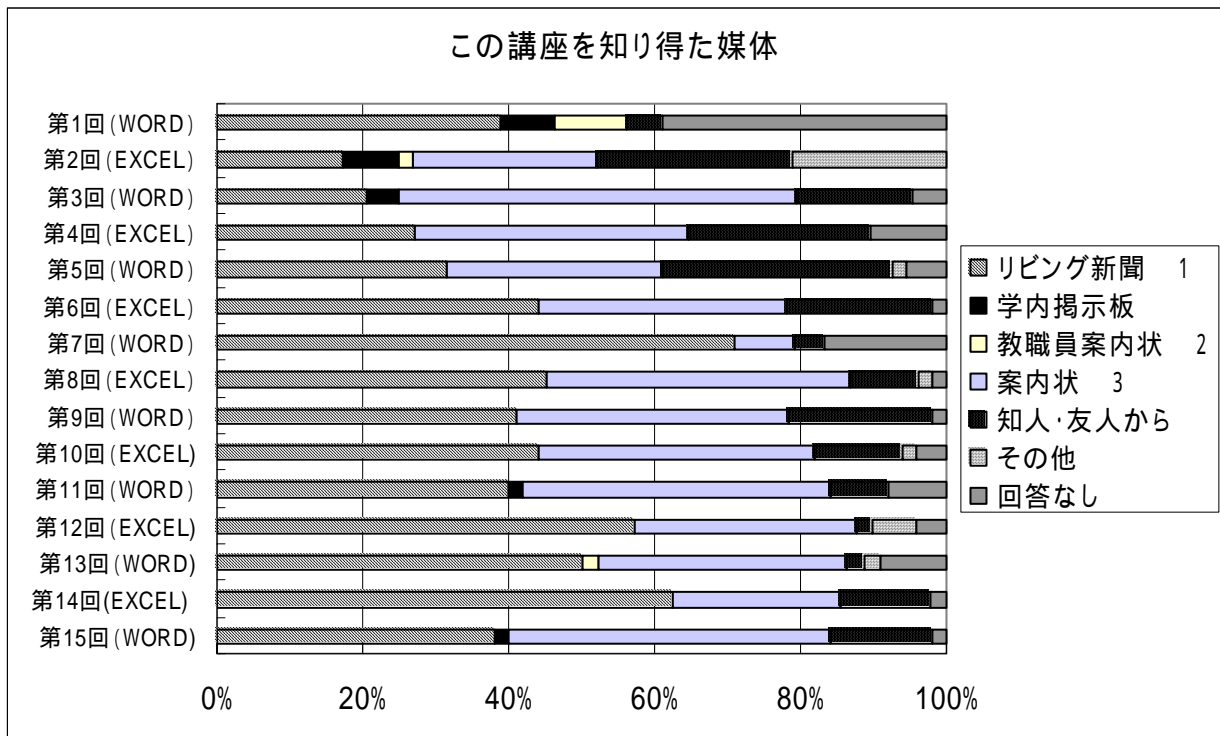
特に後半についていけなかったという感想が多い。



3. この講座を知り得た媒体

(単位:人)

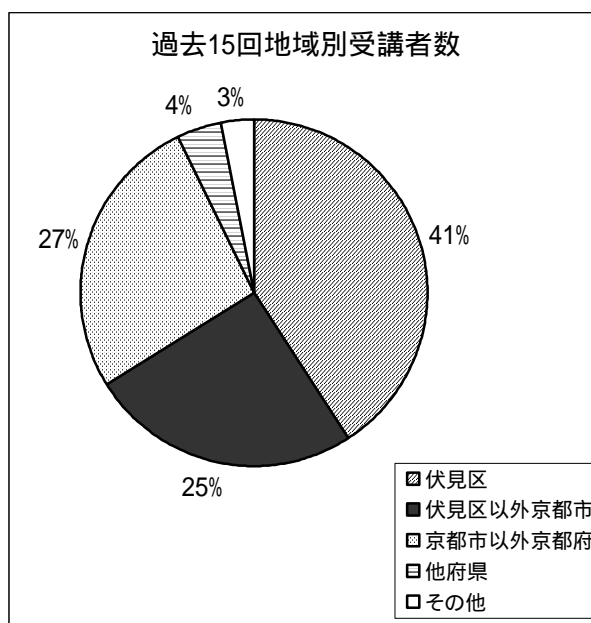
	リビング新聞 1	学内掲示板	教職員案内状 2	案内状 3	知人・友人から	その他	回答なし	集計 人数
第15回(WORD)	19	1	0	22	7	0	1	50
第14回(EXCEL)	30	0	0	11	6	0	1	48
第13回(WORD)	22	0	0	16	1	1	4	44
第12回(EXCEL)	28	0	0	15	1	3	2	49
第11回(WORD)	20	1	0	21	4	0	4	50
第10回(EXCEL)	22	0	0	19	6	1	2	50
第9回(WORD)	21	0	0	19	10	0	1	51
第8回(EXCEL)	24	0	0	22	5	1	1	53
第7回(WORD)	34	0	0	4	2	0	8	48
第6回(EXCEL)	22	0	0	17	10	0	1	50
第5回(WORD)	17	0	0	16	17	1	3	54
第4回(EXCEL)	13	0	0	18	12	0	5	48
第3回(WORD)	9	2	0	24	7	0	2	44
第2回(EXCEL)	9	4	1	13	14	11	0	52
第1回(WORD)	16	3	4	0	2	0	16	41



- 1 京都リビング新聞：リビングサロン「教えます」欄に「趣味・教養」分野で掲載
- 2 第3回以降、アンケートが4択になり、教職員への案内を見た人も「案内状」欄に印をつけているため、第3回以降は0になっている。
- 3 前回の応募者に案内状をだしている。

	第 15 回	初回から第 15 回 までの合計
合計	53	747
北区	4	20
上京区	0	11
左京区	0	19
右京区	0	24
中京区	2	15
西京区	2	9
下京区	1	3
東山区	0	6
山科区	1	49
伏見区	23	304
南区	2	33
宇治市	5	102
乙訓郡	0	8
久世郡	1	3
城陽市	5	31
長岡京市	2	20
八幡市	1	9
亀岡市	1	9
相楽郡	0	1
向日市	0	15
京田辺市	0	3
大阪府	2	20
滋賀県	0	5
兵庫県	0	2
奈良県	1	4
その他	0	22

	第 15 回	初回から第 15 回 までの合計
伏見区	23	304
伏見区以 外京都市	12	189
京都市以 外京都府	15	201
他府県	3	31
その他	0	22

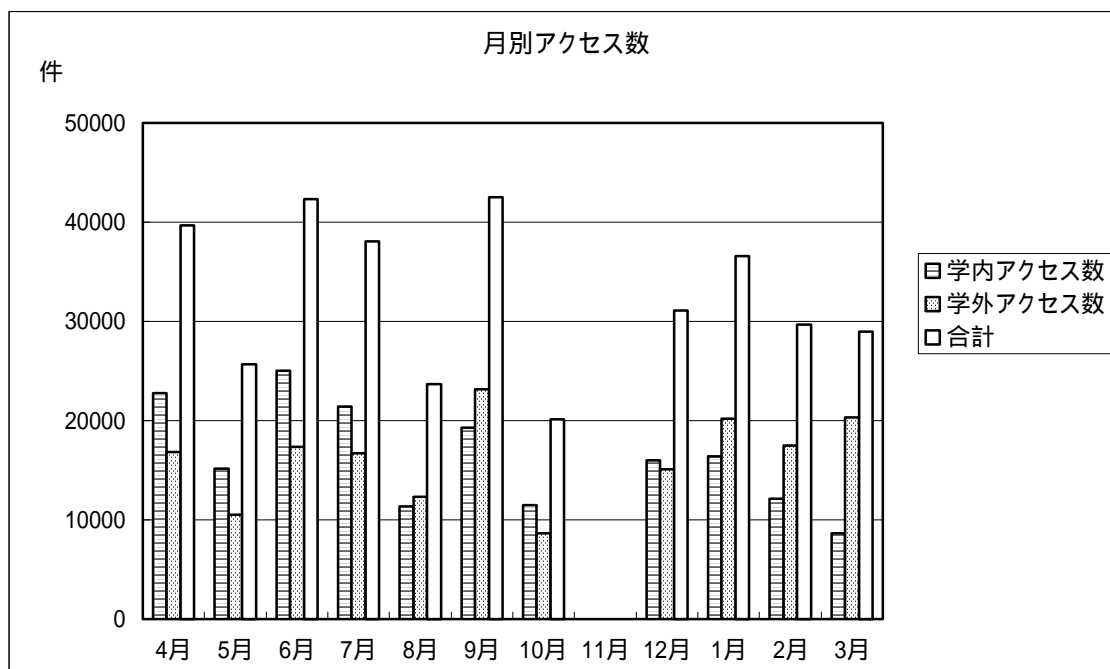


伏見区が約 4 割あるが、それ以外の京都市や近隣の地域からの受講もかなり多い。

§ 7 . 京都教育大学ホームページアクセス数

本学のホームページは、セキュリティ上、学内からのアクセス用と、学外からのアクセス用を区別して別サーバに格納している。両者の内容はアクセス数のカウンタのみ異なり、他の部分は毎日自動的に学内から学外へコピーされるので全く同じである。平成 14 年度における学内からのアクセス数と学外からのアクセス数を示す。学内アクセス件数に関しては、学内の各パソコンのブラウザのホームアドレスが本学のホームページに設定されていることが多いので実際のアクセスよりはかなり多めに出ていると思われる。学外アクセス数については授業休止期間 9、1、3 月が多く、学内者が自宅等からの利用が多いためと思われる。なお 1 1 月は調査漏れでデータはない。

	学内アクセス数	学外アクセス数	合計
2002年4月	22806	16853	39659
2002年5月	15165	10525	25690
2002年6月	25002	17328	42330
2002年7月	21388	16685	38073
2002年8月	11369	12318	23687
2002年9月	19318	23183	42501
2002年10月	11486	8617	20103
2002年11月			
2002年12月	16025	15082	31107
2003年1月	16405	20178	36583
2003年2月	12158	17515	29673
2003年3月	8613	20324	28937



§ 8 . 学内一括送信配信数

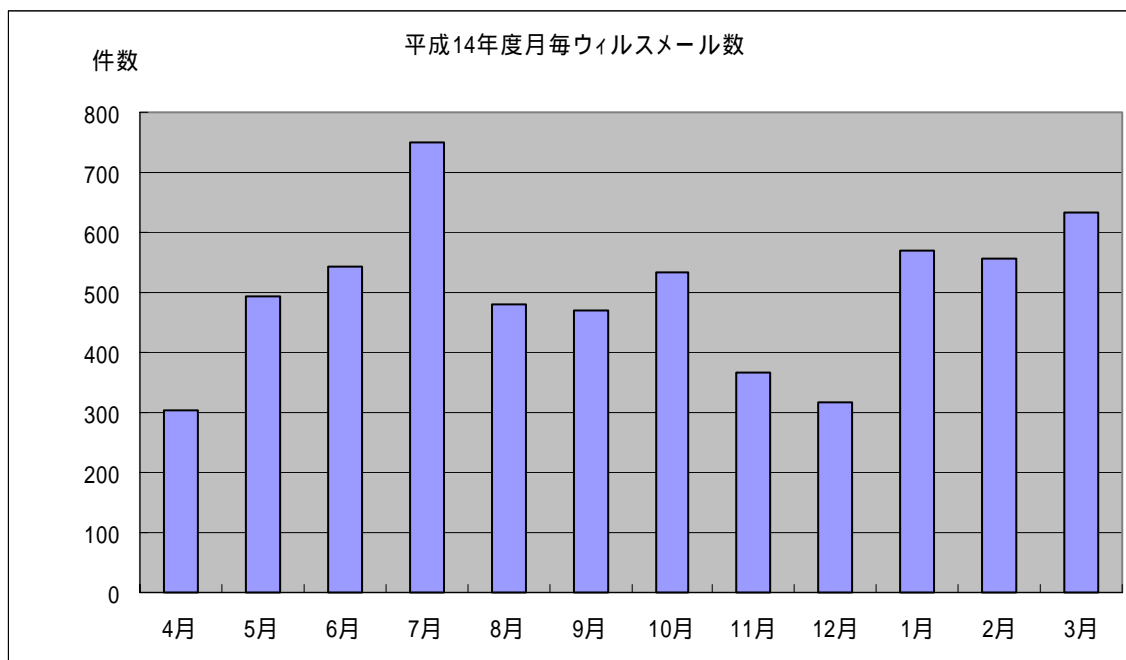
本学では学内教職員、学生に対して周知の迅速化及び徹底化を図るため、周知内容を各部局から情報処理センターに依頼し、以下の所属階層ごとに電子メールで送付する一括送信サービスを行っている。平成 14 年度依頼された各階層ごとの一括送信数は以下の通りである。依頼元は主に学内委員会、事務局、附属センターである。

全一括送信	83 件
教職員一括送信	24
全教員一括送信	6
大学教員一括送信	29
附属教員一括送信	0
職員一括送信	0
全学生一括送信	18
学部学生一括送信	0
院生一括送信	2
合計	162

§ 9 . ウィルス対策

1 . メールサーバによるウィルス駆除

本学のメールサーバはウィルス駆除システムが導入されており、学外からウィルスに感染したメールが送信されてきた場合サーバで検知し、受信者にはそのままでは送らないようにしている。平成 14 年度にウィルスを検知し対処したメール件数を示す。昨年度 1 年間で合計 6022 件のウィルスメールを発見対処している。



2. ウィルス駆除ソフト配信システム利用数

全学のパソコン端末に対し、ウィルス駆除ソフトの導入を徹底するため、ウィルス対策サーバにウィルス駆除ソフト配信システムを導入している。情報処理センターのHPからウィルス駆除ソフトがダウンロードでき、その後は配信サーバの管理のもと、ウィルス定義ファイルの自動更新、パソコンの自動チェックが行われる。現在このサービスを利用している端末数は以下の通りである。全学的に見ればまだまだ少ないので今後このサービスの拡大を図り、学内の情報セキュリティの徹底に努めたい。配信サービスを受けていない端末の一部はそれぞれでウィルス駆除ソフトを導入しているが、ウィルス対策を施していない端末もまだ多いと思われる。

A、C、理科教育棟	13	B棟、実践総合センター	18	G棟	8
D、特美、トレセン棟	2	本部庁舎	66	大学会館、図書館	7
国際交流会館、環境センター	6	高校	1	養護学校	11
桃山中学校	8	幼稚園	1	桃山小学校	2
その他	6			合計	149台

§ 10. インターネット配信

昨年度後期より動画ストリーミング配信システムを導入し、学内の主な行事を動画配信している。インターネット配信のホームページは本学のホームページから開くことができる。昨年度配信した企画を以下に示す。

平成 14 年 11 月 7～10 日	藤陵祭	主催：学生生活委員会・藤陵祭実行委員会
12 月 14 日	平成 14 年度京都教育大学公開特別講演会 「教養特別講義 2002・テーマ 3：大学」	主催：教務委員会・教養教育検討専門委員会・教養特別講義 2002WG
平成 15 年 3 月 25 日	卒業式	

情報処理センター利用授業時間割表(平成14年度前期)

		月	火	水	木	金
1 限	室					電子計算機 養老真一
	9:00 ~ 10:30		端末室清掃			
	室			物理学 高島隆一	中等家庭科教育 榊原典子(5,6 月)	
2 限	10:45 ~ 12:15	情報・言語 コミュニケーション (B)伊藤伸一	電磁気学基礎 高島隆一	地域統計論 酒井高正	化学結合論 伊吹紀男(6~7 月) (1室のみ) 中等数学科教育 守屋誠司 (4,5月)	
	室					
	室	製図 関根文太郎 (5~7月)			スポーツ情報 論 中比呂志(4~5 月)	
3 限	13:15 ~ 14:45		情報・言語 コミュニケーション (C) 棚橋菊夫	Cプログラミング 基礎・応用 佐竹伸夫 6,7 月は1室のみ	情報機器の操 作 (A) 古谷・佐竹	プログラミング言 語 (A)古谷博史
	室	障害児心理特 論 三浦正樹				
	室	留学生セミナ ー 伊藤伸一			家庭科教材演 習 榊原典子	
4 限	15:00 ~ 16:30	情報機器の操 作(C) 佐々木真理	プログラミング言 語 (B) 棚橋菊夫	Cプログラミング 基礎・応用 佐竹伸夫 6,7 月は1室のみ		プログラミング演 習 (A)古谷博史
	室					
	室	留学生基礎 A 伊藤伸一			基礎セミナー (本健)林英彰	
5 限	室			Cプログラミング 基礎・応用 佐竹伸夫 6,7 月は1室のみ		
	室		情報教育講究 (B) 佐竹伸夫			
6 限	室	分析化学特論 向井浩	情報教育講究 (B) 佐竹伸夫			

8/1~8/4: 1~4限 パソコンBasic入門(B)(情報機器の操作)(沖花) 端末室1・2

8/8~8/11: 1~4限 パソコンBasic入門(A)(情報機器の操作)(沖花) 端末室1・2

9/19, 20, 23, 24(1~4限): 情報・言語コミュニケーション(A)(情報機器の操作)(武政) 端末室1・2

前期集中: 美術教育とコンピュータ利用(安東) 端末室3

情報処理室1の一部も使用します。

情報処理センター利用授業時間割表(平成14年度後期)

		月	火	水	木	金
1 限	室			数値解析論 若井正道		
	9:00 ~ 10:30		端末室清掃			
	室					
2 限	室			FORTRAN77 プログラミング 飯間等	情報構造とデータ -タペ-ス(1月の み) 古谷博史	
	10:45 ~ 12:15		フランス語 B 入江宏和			
	室		計算機シミュ レーション 伊藤信一			
3 限	室			情報機器の操 作(B)中峯浩		プログラミング言 語 (A) 佐竹伸夫
	13:15 ~ 14:45	測定・検査 三浦正樹				
	室		総合演習 (11~12月) 後藤景子		美術教育とコン ピュータ利用 村田利裕	
4 限	室		分子軌道論 (10~1月) 伊吹紀男	情報機器の操 作(B)中峯浩	教育情報処理 古谷博史	プログラミング演 習(A) 佐竹伸夫
	15:00 ~ 16:30					
	室	住宅計画学演習 榊原典子				
5 限	室	生活情報処理 川瀬徳三		情報機器の操 作(B)中峯浩		
	室		情報教育講究 (B)佐竹伸夫			
	室					
6 限	室		情報教育講究 (B)佐竹伸夫			

11/2、3、16、17 コンピュータと情報処理 (武政) 端末室1・2

12/7、8、14、15 プログラミング言語 B (中崎) 端末室1・2

室: 端末室1 (39台) 室: 端末室2 (21台) 室: 端末室3 (20台)

平成14年度集中講義など

4/25(木)、5/2(木)、9(木)	4限	端末室1	基礎セミナー(保健体育)
6/8(土)、6/15(土)、6/16(日)	1~4限	端末室1	Fortran 77 プログラミング
6/13(木)	4限	端末室1	経済学演習 A、A
6/19(水)	2限	端末室3	力学基礎
6/20(木)	4限	端末室1・2	物理学基礎
7/6(土)、7/7(日)、 7/13(土)、7/14(日)	1~4限	端末室1	数値解析論
7/22(月)	1限	端末室2	電子回路
7/27(土)	3~4限	端末室3	中等技術科教育
7/29(月)、30(火)、31(水)	1~5限	端末室2	障害児教育工学
8/1(木)~4(日)	1~4限	端末室1・2	パソコンBASIC入門(B)
8/5(月)~8(木)	3~4限	端末室3	測定・検査論特講
8/6(火)	1~4限	端末室1・2	視聴覚教育メディア論
8/7(水)	1~4限	端末室1・2	環境と表現
8/8(木)~11(日)	1~4限	端末室1・2	パソコンBASIC入門(A)
8/20(火)~23(金)	13:15~16:30	端末室1・2	教職免許法認定講習 情報基礎
8/22(月)~25(木)	1~4限	端末室3・ 情報処理室1	美術教育とコンピュータ利用
9/2(月)~5(木)	2~5限	端末室1・2	オブジェクト指向言語
9/19(木)、20(金)、23(祝)、 24(火)	1~4限	端末室1・2	情報・言語コミュニケーション (A)
9/30(月)	9:00~ 17:00	端末室1・2	パソコンBASIC入門発表会
10/5(土)、12(土)、19(土)、 26(土)	1~4限	端末室3	情報基礎実験
10/21(月)	4限	端末室2	障害児教育講読
10/23(水)	午後	端末室3	就職ゼミ
11/7(木)	3限	端末室1	スポーツ経営学
11/21(木)	3~4限	端末室2	化学実験
12/7(土)、8(日)、14(土)、 15(日)	1~4限	端末室1・2	プログラミング言語 (B)
12/21(土)	1~4限	端末室3	情報基礎実験(補講)
12/26~28(木、金、土)	1~5限	端末室1・2	アルゴリズムとデータ構造
平成15年 2/17(月)~20(木)	1~4限	端末室1・2	マルチメディア表現と技術
2/24(月)、26(水)~28(金)	1~4限	端末室1・2	コンピュータと情報処理

平成14年度 教育学部授業科目

科目区分	授業科目	授業内容	開講期	時数	登録者数	教官
共通	基礎セミナー (保体)	・Windowsの基本的な使い方(起動・終了) ・WORDの使い方 ・Eメールの送受信 ・画像の取り扱い方 ・印刷の仕方	前	2	22	遠藤
	基礎セミナー (スポ健)	スポーツ・健康に関する研究領域及び専門職の現状を理解し、各自が個別課題を選択し、その課題に関する調査・報告・討議を行った。 IPCでは報告書作成に関する情報リソースの利用とワープロ・表計算ソフト等による文書作成を主に行った。	前	2	16	林
	留学生セミナー (a)	WORD、スキャナ、メール、wwwソフトを利用したのコンピュータリテラシー	前	2	12	伊藤
	留学生基礎A	EXCELを使った表、グラフの作成	前	2	6	伊藤
	パソコン Basic 入門 (A)(B)	パソコン初心者のための入門教育 ・windowsの操作・電子メール・インターネット ・マルチメディア(画像取り込み・音声入力) ・WORD 入門 ・EXCEL 入門 ・Power Point 入門 ・Front Page 入門	前	2	(A) 50 (B) 40	沖花
	パソコン Basic 発表会	パソコン Basic の授業の成果発表ということで受講者が作成したパワーポイントもしくはホームページの発表を各自プロジェクトを用いて行った。 (午前・午後2クラス)	前	2	35・ 45	沖花
	フランス語 B	学生はワードを使って仏文を処理。インターネットを使ってフランスのサイトにアクセスし、情報を得ることができるようになった。	後	2	13	入江

共通	情報機器の操作 (A)	メールシステム、EXCEL、WORD の使用法を指導した。	前	2	60	古谷 佐竹
	情報機器の操作 (B)	ワードによるレポート作成、エクセルによるデータ整理、データ分析、マクロプログラミング、パワーポイントによるプレゼンテーション。	後	2	57	中峯
	情報機器の操作 (C)	<p>「小・中学校で使用する情報機器や教育用ソフトウェアの操作を習得する」ことを目標にした。授業の概要は、全国の多数の小・中学校で導入・利用されている教育用統合ソフトウェア「Cube Net」(スズキ教育ソフト(株)製)の基本操作を習得する。次に、これらのソフトウェアを使用して、文書作成、作図・描画、作曲・編曲を行い、これらマルチメディア素材(文字・画像・音声など)を組み立てて、マルチメディアCAI教材を開発・制作することを指導内容とした。作品は、個人制作とした。演習のテキストとして「かきくけコンピュータ」(スズキ教育ソフト(株)製)を用いた。また、学習用CAI教材CD-ROM「かきくけコンピュータ」(スズキ教育ソフト(株)製)と素材CD-ROM(自作)を利用した。授業の形式は、コンピュータを使用した演習で、月曜日4限に情報処理センター端末室1で実施した。評価の方法は作品・レポート提出を義務づけ、出席点や実習態度を重視して評価した。受講した学生の構成は、情報機器の操作Cでは、情報造形1名、美術教育16名、音楽教育8名、情報教育2名の計27名であった。</p> <p>演習は、3つの部分から成り、操作法の習得、A・B2つのボタンによるコース選択を入れた教材の制作、自由な教材の制作、で構成した。繰り返しの練習により、手続き的知識としての情報活用能力の育成を図った。受講生の制作したマルチメディア教材作品は、希望する受講生が持参したCD-ROMに記録して配布した。</p>	前	2	27	佐々木

共通	<p>情報・言語 コミュニケーション (A)(C)</p>	<p>HTMLによるホームページの作成 1. HTMLの基本知識 (1)HTMLの基本ルール HTMLファイルの作成方法、HTMLの基本構造 (2)テキストの配置・装飾 見出し、段落、改行、センタリング、フォント、リスト (3)テーブルの作成 (4)イメージの表示とリンクの設定 (5)フレームの利用 2. イメージデータの作成 画像データの取り込み、修正、アニメーションの作成 3. 課題の作成 自分のホームページの作成</p>	前	2	(A) 57 (C) 55	棚橋
	<p>情報・言語 コミュニケーション (B)</p>	<p>・HTML、JavaScript の演習 ・メモ帳、インターネットエクスプローラー ・Photo Editor</p>	前	2	60	伊藤
	<p>視聴覚教育 メディア論</p>	<p>高度情報通信社会における視聴覚教育メディアの一つとしてマルチメディアを取り上げ、博物館の電子掲示や電子図書館の Web を自分で調査させた。 又、パワーポイントを利用した視聴覚教材の作成方法を説明し、学生に視聴覚教材作成の演習をさせた。</p>	前	2	59	宮田

家政	家庭科教材演習	家庭科では日常の生活素材を教材にすることが多く、実物を教室に持ち込めないケースも少なくないために、従来は写真やビデオ映像で再現することが多かった。この演習では日常の生活の中から、家庭科教材として有効な素材をデジタルカメラやビデオ映像で採取してきて、オーサリングソフトによりテキストや描画、静止画、動画、音声等の融合・再構成をはかって対話型の家庭科デジタル教材を作成する試みを行った。	前	2	8	榊原
	生活情報処理	1、WORD により日本語変換と文章の整形に関する最低限の知識を習得。2、EXCEL における概念を把握し、簡単な表計算を通して重回帰を解説。3、デジタルの概念とデジタル処理の実際について、画像処理(PhotoShop)と動画処理編集(Media Studio)を実習。サンプルデータは CD-R で配布し授業終了後に回収。4、編集した動画(WMV に変換)を載せた HP を作成。5、これを全員で閲覧して評価しようとしたが、残念ながら大学の教育用 WEB システムが存在しないので、5についてはできなかった。	後	2	30	川瀬
	住宅計画学演習	住宅設計製図に必要な技法を習得するためにフリーウェアの JW - CAD を用いて、住宅の基本図面(配置図、平面図、インテリアパース<室内透視図>)の制作を行った。	後	2	6	榊原
教職	中等家庭科教育	インターネット、表計算ソフト、電子メールを利用し、中学校技術家庭および高等学校家庭の授業実践例や教材研究の探索を行い、家庭科教育資料リンク集を作成して受講者で交換しあった。	前	2	24	榊原
	中等技術科教育	中学校技術科の情報基礎と電気の分野に関する学習方法を理解し、指導するためにパソコンを使った実習を行った。タイトルは「サーモスタットの働きを調べる」であった。	前	2	12	土屋

教職	総合演習	総合演習(B8)「日本を探そう」で個別発表のプレゼンテーション準備を行った。インターネットや著書からの情報を入力しパワーポイントにより資料を作成。	後	2	20	後藤
産業技術	Fortran77プログラミング	Fortranの歴史の話から始め、次に変数とはいかなるものかを詳しく話した。又、整数型と実数型の例題を示しながら、その違いを話し、IFブロック文の話をした。	前	2	12	武政
	数値解析論	「浮動小数点とは何か？」から講義をし、次に2進法の話をした。又、桁落ちの起こらない公式の使い方や、非線形方程式の解法、2分法・逐次代入法、エイトケンのデルタ2乗法の話をした。最後にニュートン法について詳しく講義した。	前	2	14	武政
	製図	JW-CADを利用した基本製図並びに、機械製図	前	2	65	関根
	オブジェクト指向言語	オブジェクト指向言語について文法の講義とその演習を行った。	前	2	21	小無
	電子回路	インストール不要の電子回路シュミレータソフト「SPICE」を用いてトランジスタ動作の理解とCR結合エミッタ接地増幅回路のシミュレーションを行った。	前	2	6	田村
	プログラミング言語(B)	表計算ソフトの利用技術の習得 1. 基本操作の復習 (1)絶対参照と相対参照 (2)データの並び替え、基本関数 (3)グラフの作成(グラフの装飾、種類の変更、複合グラフの作成)と印刷 2. 表計算の応用知識 (1)関数の利用(日付、文字列、IF、VLOOKUP等) (2)データの読み込み・抽出(データベース機能) (3)クロス集計(ピボットテーブルの利用) 3. 課題の作成 パートタイマーの給与計算システムの作成	前	2	27	棚橋

産業技術	Cプログラミング 基礎・応用	Cプログラミング基礎 ・Cプログラムのコンパイルの仕方・実行方法 ・分析コンパイルの方法 ・基本データ型、記憶クラス、関数、演算子、 配列、制御文等のCプログラミングの基礎 Cプログラミング応用 ・ポインタ、ポインタへのポインタ、ファイルへ の読み書き、構造体、ビット操作、データ構造 の構築等、Cらしくプログラムを書くための方 法論 以上の講義を行った。	前	6	基礎 51 応用 49	佐竹
	プログラミング言語 (A)	Fortranのプログラミングを指導し、演習を行っ た。	前	2	34	古谷
	プログラミング演習 (A)					
	プログラミング言語 (A)	前半4回 DOS の講義では、内部コマンド、外 部コマンド、ファイル・システム、リダイレクショ ンパイプ、PATH、バッチ・ファイル、ラインエデ ィタ、画面エディタの講義。後半9回 Pascal の講義では、ループ、関数、手続き再帰呼び 出し、変数のスコープの講義。	後	2	50	佐竹
	プログラミング言語 (B)	Visual BASIC ver.6 を用いてプログラミングの 初歩を習得させる。	後	2	7	中崎
	プログラミング演習 (A)	前半4回 DOS の講義では、内部コマンド、外 部コマンド、ファイル・システム、リダイレクショ ン、パイプ、PATH、バッチ・ファイル、ラインエ ディタ、画面エディタの演習。後半9回 P a s c a l の演習では、ループ、関数、手続き再帰呼 び出し、変数のスコープの演習。	後	2	50	佐竹
	数値解析論	FORTTRAN の実習。	後	2	22	若井
	FORTTRAN プロ グラム	FORTTRAN 言語を説明し、C pad for Salford FTN77 を用いてプログラムを作成する練習を 行った。	後	2	26	飯間
	教育情報処理	プログラミングの実習。	後	2	20	古谷
	情報構造と データベース	Access を用いてデータベースの検索の実習 をおこなった。	後	2	28	古谷

産業 技術	情報基礎実験	<p>日時・内容(使用ソフトウェア他)</p> <p>10/12 午前 ・ネットワークとプロトコル(独自ソフト、IE、Web 上で動作するメーラ)</p> <p>10/12 午後 ・html言語と Web の仕組み(独自ソフト、IE、Netscape)</p> <p>10/19 午前 ・Word を使った高度な文章作成 (Word、IE)</p> <p>10/19 午後 ・N graph を使ったグラフ作成 (N graph、IE)</p> <p>10/26 午前 ・ベジェ曲線(独自ソフト、IE、パワーポイント)</p> <p>10/26 午後 ・パワーポイントを使ったアニメーション、色彩学(IE、パワーポイント)</p>	後	2	15	藪
	計算機シミュレーション	フォートランプログラム、Visual Basic を使用。粒子シミュレーションを行ない、結果を表にまとめる実習行った。	後	2	15	伊藤
	アルゴリズムとデータ構造	アルゴリズムの演習を WINDOWS で行った。	後	2	42	松村
社会	経済学演習 (A)・ (A)	ゼミにおける学生の発表とそれに対する応答に、実験的にIPCの装置を拝借した。学生1人1台のパソコンを当て、WING-NET を用いてパワーポイントのスライド画面を表示し、インターネット上の掲示板による意見交換を試みさせた。1つのスライドの転送に思っていたより時間がかかったが、とにかくゼミ学生にパワーポイントを用いたプレゼンテーションの方法の1つを体験させられたことが収穫であった。	前	2	14	田岡
	地域統計論	主に Microsoft EXCEL を用いて、地域統計利用のための基本的指標を指導した。(記述統計、立地係数、相関係数、回帰直線)又、SPSS の利用についても紹介した。更にインターネット上の WEB サイトで提供される地域情報(地図情報、統計情報など)についても紹介した。	前	2	27	酒井
数学	情報教育講究 (B)	今年度の受講生のプログラミング技術がとても成熟しているとは言えないので、前期はC言語によるプログラミングの復習を行っている。主にポインタと関数の再帰呼び出しとデータ構造の構築について復習した。後期に入って各自が独自の卒業研究を行う予定である。今年度はいきなり卒業研究を始めるのは難しいと判断した結果の基礎固めである。	前	4	6	佐竹

数学	電子計算機	プログラミング経験のない学生を対象として、プログラムの初歩を身につけさせる事を目的として授業を行った。言語としてはFortran90を採用した。内容としては変数の型、制御構造、副プログラムを取り上げた。ほぼ毎回プログラムの作成を学生に課して提出を求めた。	前	2	40	養老
	情報教育講究 (B)	JAVA スレッドを用いた、チャットシステムの開発。C++により、RSA 暗号を用いたファイル転送システムの開発。JAVA アプレットにより、カオスのローレンツ・アトラクタの表示。JSPとCGIの違いの研究。JAVA アプレットにより巡回セールスマン問題を題材として、遺伝的アルゴリズム・ボルツマンマシン・自己組織化アルゴリズムの差異の研究。JAVA アプレットにより各種条件下での鉄道経路表示システムの開発。	後	4	6	佐竹
体育	スポーツ情報論	エクセルを用いたデータ分析を中心に演習形式で授業を実施した。演習課題としては自分たちの体力測定によるデータを利用し、体力診断を行う。	前	2	10	中
	スポーツ経営学	パワーポイントの使い方について授業を展開した。	後	2	40	中
発達障害	障害児心理特論	エクセルの操作・記述統計・平均値の差の検定(t検定)・x2 検定	前	2	5	三浦
	測定・検査法	EXCELの基本操作、関数、記述統計、相関係数、平均値の差の検定、度数の検定、SPSSによる統計。	後	2	5	三浦
	障害児教育講読	講読の授業の一段階として文献検索の手法を知る必要がある。そこで、雑誌記事索引、Web cat 等のデータベースの利用を教示した。	後	2	13	吉利
美術	美術教育とコンピュータ利用	Mac G4を2組(2台)利用し、プレミア6.0を利用したビデオクリップ作成の技法・表現指導を授業内容とした。	前	2	4	安東
	環境と表現	1. 牛尾啓三のHPを見る。 2. 国内の環境造形に関するサイトの検索及び調査。 3. 海外の“牛尾啓三”に関するサイトを見る。 4. Web上での翻訳サイトの利用方法の指導。 5. 世界の“Open Air Museum”を検索。	前	2	15	牛尾
	美術教育とコンピュータ利用	全13回の授業で、美術分析にワードを使うこと(デジカメの画像を張り込む)、エクセルの統計的利用に連動したグラフ機能やベクトル系グラフィックスの可能性を探る。また、パワーポイントの基本的利用からアニメーションシステムとしての利用、フォトショップの基本からレイヤー機能の利用などを演習した。	後	2	16	村田

理 学	化学結合論	量子化学は本質的には数学的記述である。これを物質の化学結合、化学反応、物性の視点から理解するためには数学的論理展開だけでは不十分である。そこで WinMOPAC ソフトを使って分子軌道を可視化し、講義内容の理解を深めることに活用した。	前	2	25	伊吹
	力学基礎	V B を用いて運動方程式から物体の運動をグラフにするプログラミングを行った	前	2	20	沖花
	物理学基礎	D V Raputor を用いてビデオ編集し、100m 走での「時間-距離」のデータを作成した。又、EXCEL を用いて「時間-距離」、「速度-距離」、「加速度-距離」のグラフを作成した。	前	2	60	沖花
	物理学	IPC は 3 回利用した。通常の講義を行った後、Common Gateway Interface、パールスクリプトの解説を行った。CGI を使ったパールスクリプトを用いて、各人のアクセスした Web ページの内容を紹介したものをファイルに入力してもらった。最終回では、通常の講義の後受講した感想を同様に、CGI パールスクリプトを使って入力してもらった	前	2	20	高嶋
	分子軌道論	化学結合の基本である分子軌道という数学的概念を可視化して理解するために利用。ただし、今期はトラブルが多くスムーズな講義展開ができなかった。	後	2	28	伊吹
	化学実験	表計算ソフトを用いた滴定曲線の作成。	後	2	14	向井
農 業 商 業 情 報	マルチメディア表現と技術	アニメーションサウンドを使用したインタラクティブ web サイトの作成。	後	2	52	渡壁
	コンピュータと情報処理	新しい最適化手法を提案し、プログラミング言語を用いてプログラムを作成し、計算機実験を行った。その報告書を WORD、EXCEL などを用いて作成するとともに、PowerPoint によるプレゼンテーションを行った。	後	2	52	飯間

平成14年度 特殊教育特別専攻科授業科目

授業科目	授業内容	開講期	時数	登録者数	教官
障害児教育工学	特専学生を対象に障害児教育現場で必要となる情報に関わる技能と、障害児教育に関わる情報の収集と分析の方法及び、プレゼンテーションの方法について情報処理センターPCを利用した実習を中心として教授した。	前	2	15	梶川

平成14年度 教育職員免許法等

授業科目	授業内容	開講期	時数	登録者数	教官
教育職員免許法認定講習情報基礎	インターネット、ホームページ作成、表計算、ワープロについて演習を行った。	前	2	16	古谷伊藤

平成 14 年度情報処理センターニュースの発行状況

平成 14 年度は、IPC NEWS No.90 (2001 年 4 月 1 日) から No.100 (2002 年 3 月 3 日) まで合計 11 回発行しました。これらのニュースでは、各月の行事予定 (定期保守日、休館日、利用相談日) および集中講義・公開講座の開催について利用者に知らせるとともに、計算機利用、ネットワーク利用についての様々な学内への情報提供を行なっています。

各月の主だった内容は以下の通りです。(行事予定、前月の再録は省いてあります。)

- No.90 学内ネットワークの更新について
各種利用の手引き
機器の貸し出しについて (予約方法の変更)
平成 14 年度前期 IPC 利用授業時間割表
W32/Fbound W32/Gibe ウィルス情報
- No.91 登録削除について
W32/Klez ウィルス情報
- No.92. 学内ネットワークの更新について
Real player の設定について
講義室での無線 LAN について
ウィルスソフト配信システムのテスト運用開始について
ウィルス添付メール数
- No.93 IPC 夏期利用につて
ウィルスソフト配信システムの運用開始について
講義室のプロジェクタについて
端末室のプリンタ利用について
デマメールについて
- No.94 貸出用ノート PC のマウスについて
ウィルスソフト配信システムについて
W32/Frethem ウィルス情報
本学ウィルス発見件数 6 , 7 月
- No.95 IPC 事務補佐員の交代について
IPC 年報の配布
講義室のプロジェクタについて (複数のパソコン接続ができます)
ウィルスソフト配信システムの運用開始について
W32/klez ウィルス情報
平成 14 年度後期 IPC 利用授業時間割表
- No.96 平成 15 年度授業利用調査
メールアドレスの整理について
ウィルスソフト配信システムをご利用下さい
W32/Bugbear ウィルス情報

- 本学メールウィルス発見件数 8 , 9 月
- No.97** 平成 15 年度授業利用について
パスワードの管理について
ウィルス駆除ソフト配信システムをご利用下さい
W32/Opaserv ウィルス情報
- No.98** 平成 14 年度 IPC 利用結果報告書の提出のお願い
DVD-R / RW の館内利用について
靴の盗難について
ウィルス年末警報
本学メールウィルス発見件数 10 , 11 月
- No.99** メールソフトの設定変更について
電子メール継続利用について
平成 15 年度年度授業利用申請について
デジタルビデオカメラ購入しました
W32/Sobig ウィルス情報
- No.100** 科目等履修生・特別聴講学生の利用について
個人領域の拡大
VBS/Redlof ウィルス情報
本学メールウィルス発見件数 12 , 1 月

平成14年度行事日誌

平成14年

- 4月 1日 学外との専用回線 10Mbps に増強
- 4月 1日 IPC NEWS No.90 発行
- 4月 2日 4月スタッフ会議
- 4月 7日 ふれあい伏見ウォーク一般開放「インターネット体験」
- 4月10日 新入生ガイダンス
- 4月13、20日 新入生導入講習会 情報倫理・電子メール(参加 約250名)
- 4月 9~26日 ミニ講習会電子メール・WORD(参加 計26名)
- 4月25日 富士通との定例会
- 5月 1日 IPC NEWS No.91 発行
- 5月17日 5月スタッフ会議
- 5月17日 事務補佐員交替
- 5月30日 富士通との定例会
- 6月 3日 IPC NEWS No.92 発行
- 6月 2日 社会人のためのパソコン講座 WORD 入門(参加50名)
- 6月13日 6月スタッフ会議
- 6月20日 富士通との定例会
- 6月28日 国立大学情報処理センター協議会総会(東京電気通信大学)
- 7月 1日 IPC NEWS No.93 発行
- 7月18日 7月スタッフ会議
- 7月25日 富士通との定例会
- 7月25日 IPC 運営委員会 情報処理センター規定の改正
- 7月27日 オープンキャンパス 施設見学・インターネット体験(参加100名)
- 8月12~18日 夏期休館
- 8月15日 停電(定期電気工事)によるサーバの停止
- 9月 2日 IPC NEWS No.94 発行
- 9月 5日 富士通との定例会
- 9月 8日 社会人のためのパソコン講座 Excel 入門(参加55名)
- 9月19日 9月スタッフ会議
- 10月 1日 事務補佐員交替
- 10月 1日 IPC NEWS No.95 発行
- 10月10日 富士通との定例会
- 10月17日 10月スタッフ会議
- 10月31日 府立桃山高校見学(44名)
- 11月 1日 IPC NEWS No.96 発行
- 11月 7~10日 藤陵祭インターネット配信
- 11月 9日 南山東子供会見学・インターネット体験(10名)
- 11月 9~10日 藤陵祭一般開放 インターネット体験(参加18名)

- 11月14日 富士通との定例会
- 11月21日 11月スタッフ会議
- 11月26日 大学評価機構による外部調査
- 11月28日 タイ・ラバチャット地域総合大学アユタヤ校見学(11名)
- 12月1日 IPC NEWS No.97 発行
- 12月12日 富士通との定例会
- 12月14日 教養特別講座 2002 インターネット配信
- 12月20日 InternetWeek2002(パシフィコ横浜)
- 12月23日 社会人のためのパソコン講座 WORD 入門(参加48名)
- 12月24日 12月スタッフ会議
- 12月28日~1月5日 冬期休館

平成15年

- 1月6日 IPC NEWS No.98 発行
- 1月より学内認証システム運用開始
- 1月23日 富士通との定例会
- 1月23日 1月スタッフ会議
- 2月3日 IPC NEWS No.99 発行
- 2月20日 富士通との定例会
- 2月20日 2月スタッフ会議
- 3月3日 IPC NEWS No.100 発行
- 3月3日 社会人のためのパソコン講座 Excel 入門(参加50名)
- 3月20日 富士通との定例会
- 3月25日 卒業式インターネット配信
- 3月26日 3月スタッフ会議

情報処理センターワークステーション利用者一覧

(順不同・電子メール、インターネットのみの利用及び授業受講は除く)

氏名	利用目的
中西 洋子	文献の検索
矢野 喜夫	研究情報交換・教務情報連絡
川村 康文	物理教育の情報化
伊藤 伸一	遷移金属の磁性に関する理論計算
中峯 浩	システム(協同学習、ロボット魚群行動)のモデリング及びシミュレーション
大森 美香	青年期のヘルスリスク行動に関する研究
佐竹 伸夫	過去にC言語の授業で使ったCプログラムの改良 子供の第一言語習得データの解析と解析ツールの開発 京大大型計算機への接続とFTPに使用
宮崎 充弘	可換環論
大竹 博巳	複素解析学の研究
杉本 厚夫	ビデオ編集(ビデオ編集用パソコンを利用)
冷水 來生	障害児の心理 発達障害学
廣川 伸一	総合的な学習におけるネットワークの利用
向井 浩	文献の検索、データベースの利用
芝原 寛泰	結晶構造解析
谷口 慶祐	断層破砕帯の力学的特性の研究
小磯 深幸	幾何学的変分問題に関する研究
養老 真一	授業「電子計算機」に関連しての FORTRAN のソース・ファイル転送 授業「電子計算機」に関連しての FORTRAN の教材作成
松浦 賢長	母子保健情報データベースシステムの開発
手島 光司	流体運動の計算
古谷 博史	遺伝的アルゴリズムの理論的研究
高嶋 隆一	素粒子物理学の教育と研究
上田 博之	デザイン研究 の製作
榊原 典子	教材作成(ビデオ編集用パソコンを利用)
芝原研究室	結晶構造解析
帳 峰	強化学習を用いて障害物に対する魚群行動のシミュレーション
守富 裕	修論等で数値計算用に利用及びewsの学外操作利用
藤田 進吾	卒業研究のため暗号の解読を研究
橋口 悟	遺伝的アルゴリズムの理論的解析
川野 泰雄	卒業研究のため遺伝的アルゴリズムの理論的解析
堺 大樹	遺伝アルゴリズムによる小型移動ロボットの行動制御に関する研究
重枝 仁志	Ar クラスターの相転移に関する分子動力学シミュレーション
村山 芳幸	卒論研究
山田 洋平	卒論研究

情報処理センター関連委員会等歴代委員

	氏名	平成12年度	13年度	14年度	15年度
運営委員会 委員長 役職指定	辻 朗				
	矢野 喜夫				
	沖花 彰				
	梁川 正				
	佐竹 伸夫				
	中 比呂志				
	伊藤 悦子				
	友久 久雄				
	福間 則夫				
	武政 尹士				
	垣内 幸夫				
	佐々木真理				
	三野 衛				
	荻野 雄				
	宗雪 修三				
田中 里志					
安江 勉					
浅井 和行					
	氏名	平成12年度	13年度	14年度	15年度
運用担当者 センター長 次長 事務局	辻 朗				
	矢野 喜夫				
	寺田 光世				
	伊藤 伸一				
	沖花 彰				
	杉本 厚夫				
	谷口 慶祐				
	榊原 典子				
	古谷 博史				
	佐竹 伸夫				
	松浦 賢長				
	村田 利裕				
	中峯 浩				
	佐々木真理				
	浅井 和行				
高木亜里子					
吉村 一美					
高橋 千歳					
武田 美紀					
伊川ゆかり					
仲井百合子					
赤坂 雅子					

編集後記

今回も多くの先生方から IT 活用に関するご寄稿をいただいた。その内容を見るとコンピュータやネットワークというものがいかに幅広く活用されているかがわかる。こういった IT 活用が本学の教育・研究の促進ならびに社会に出て行く学生諸君の大きな糧となっていることは間違いない。こういった情報化社会の積極的な流れに対し、その影の側面が大きく現れ、本学においても少なからず影響を及ぼしている。この年報の編集作業の最中に MS-Blaster がインターネット上に広がり多くのパソコンに被害をもたらしているが、本学でも例外にもれず、学内に侵入を許し、その駆除に今も追われている。ファイウォールという大きな壁のもとで保護されていると高をくくっていたが、インターネットとの接点はファイアウォールだけではなくすべての学内ネットワークへの接点に対し徹底した管理を行っていないと今回のように侵入されてしまう。いったん侵入されるともろいもので、個々のパソコンに駆除ソフトを導入しているものが 1 / 3 にも満たない現状ではあっという間に学内全体に広がっていった。これまでの利用者任せの管理から大学としての組織的な管理体制の構築・強化の必要性を痛感している。そのためにはそれだけの人的維持管理体制が大学にとって必要不可欠である。こういった現状認識と支援を関係各位に是非お願いしたい。(沖花)

編集委員

矢野 喜夫	沖花 彰	寺田 光世
古谷 博史	杉本 厚夫	佐竹 伸夫
榊原 典子	村田 利裕	中峯 浩
谷口 慶祐	伊藤 伸一	佐々木真理
仲井百合子	赤坂 雅子	